高梁川流域連携中枢都市圏事業

高梁川流域学校

第2期年次報告書

2017年3月

一般社団法人 高梁川流域学校

備中は、まさに一円

高梁川流域学校を開いてから、2年が過ぎようとしています。

流域の風土（自然環境）と文化（暮らしの歴史）を正当に理解して、それをさまざまな地域活性化に生かしていく、そして、そうした活動を次世代にもつないでいく、という主旨のもとで活動をしています。平成28年度は、高梁川流域連携中枢都市圏事業として、備中志塾、高梁川トレイル、高梁川マルシェ、高梁川上・中流域の環境保全と暮らしを学び体験しよう！（SAVE JAPANプロジェクト）、備中の食育（シシ肉から考える明日の食卓）、コンビナートの進化、高梁フォレストジャンボリー、高梁キッズキャンプの8事業を行いました。また、高梁川流域高校生ビジネスプランコンテスト、自然体験リーダー研修を受託し、協力事業として、備中で暮らし匠への「聞き書き」、備中町家クラス、三世代交流モノづくり事業などと協働しています。それらの内容と進捗状況について、本日ミーティングでの報告にゆずりますが、まずは順調なすべりだしであろう、と自負しております。

高梁川流域学校での活動をはじめて、あらためて実感をしたのは、「流域のまとまりのよさ」ということです。いいかえれば、「備中のまとまりのよさ」ということです。

備中とは、いうまでもなく古代から近世まで続いた国割りにもとづいています。この備中のほぼ全域を、高梁川とその支流が網の目のようにつないで流れ、瀬戸内海に通じているのです。支流の最上流の一部が備前や備後にかかってはいますが、高梁川は備中で完結をみている、といえます。その川の流れが、それぞれの平地や台地、山地を区分したり迂回したりしているのです。けっして大河とはいえない高梁川。それは、私たちの暮らしを分断するものではありません。

ゆえに、小地域ごとに多様な歴史・文化の相をもちながら、備中は一円なのです。歴史を通じて安定して平和な暮らしを保ってきた、その大きな理由をもそこに見出せるでしょう。

このような土地柄は、全国的にみても特異なものです。私たち高梁川流域学校にたずさわる者は、この地の利を生かし、それぞれの地域での活動を連携して、「備中人の誇り」を過去・現在・未来としっかりとつないでいきたい、と思います。

皆さまのいっそうのご理解とご協力をお願いするしだいです。

高梁川流域学校 校長 神崎宜武

神崎宣武（かんざき のりたけ）

一九四四年、岡山県生まれ。民俗学者。主な研究テーマは、「民間信仰」、「まつりと食文化」、「旅と観光」など。現在、旅の文化研究所所長、文化審議会専門委員、東京農業大学客員教授、岡山県文化振興審議会委員などをつとめる。岡山県宇佐八幡神社宮司でもある。

主著に、『神さま仏さまご先祖さま―「ニッポン教」の民俗学』（小学館）、『「うつわ」を食らう―日本人と食事の文化』（日本放送出版協会）、『図説 日本のうつわ―食事の文化を探る』（河出書房新社）、『三三九度―日本的契約の民俗誌』（岩波書店）、『江戸の旅文化』（岩波新書）、『「まつり」の食文化』（角川選書）、『酒の日本文化』『しきたりの日本文化』『旬の日本文化』『「おじぎ」の日本文化』（角川ソフィア文庫）、『大和屋物語―大阪ミナミの花街民俗史』（岩波書店）などがある。

高梁川流域学校

目次

02　ご挨拶

03　目次

04　高梁川流域学校について
一般社団法人高梁川流域学校 代表理事　大久保 憲作

05　３年目を迎えた高梁川流域学校に寄せて
公益社団法人共存の森ネットワーク理事長、一般社団法人高梁川流域学校顧問　澁澤 寿一

高梁川流域学校のための「社会的インパクト評価」のすゝめ
一般社団法人高梁川流域学校　理事、一般社団法人高梁川プレゼンターレ　代表理事　坂ノ上 博史

07　事業紹介
08　備中志塾
09　高梁川トレイル
10　高梁川マルシェ
11　SAVE JAPAN プロジェクト
12　高梁川の環境保全
13　備中の食育
14　水島コンビナートの進化
15　高梁フォレストジャンボリー
16　高梁キッズキャンプ
17　高梁川ミーティング
18　高梁川流域学生ビジネスプランコンテスト事業
19　備中ｎｏ町家ｄｅクラス
20　子ども自然体験プログラムリーダー研修
21　環境省「地域循環共生圏構築検討業務」

22　組織概要
36　巻末資料
「つなげよう、支えよう森里川海プロジェクト今後の展開について」

高梁川流域学校について

一般社団法人高梁川流域学校 代表理事 大久保 憲作

高梁川流域学校は、日本でも珍しい「流域思考」の運動です。

高梁川流域学校がスタートしてもうすぐ丸2年、事業も概ね順調に進んでいます。流域学校と言う名前も、メディアでの報道効果もあり、昨今は流域の皆様に多少知られるようになりました。

この一年を振り返ってみます。まず昨年5月のG7倉敷教育大臣会合。私たちも地域の人材育成を目標にしていますので、世界からの教育に関わるトップの集まりに多くの刺激を受けました。まとめられた「倉敷宣言」には、これからの時代、教育分野における、誠に重要なメッセージが書かれています。流域学校の今後の運営において大切な道しるべになると確信しました。

宣言に謳われた、多様性（ダイバーシティ）やESD（持続可能な発展のための教育）の重要性を認識し、地域の共通価値を尊重することは、高梁川流域連盟や高梁川流域学校の志と相通ずるものがあります。私はこれらの推進のためには、流域の行政や市民団体が担う役割のみならず、そこにある経済団体・企業の支援が鍵になるだろうと考えています。

その企業支援分野において今年度は大きな進展がありました。一つは児島を創業の地とし、今ではグローバルビジネスを展開する「サンワサプライ株式会社」が、私たちの学校の考えに共鳴して下さり、多額の寄付をして頂いたことです。有り難く心から御礼申し上げます。

もう一つは高梁川流域にある4つの信用金庫（備北・吉備・玉島・水島）さんと、高梁川流域の持続的発展に繋がる双方の事業目的に関する包括協定を締結したことです。高梁川流域応援定期預金「高梁川の恵み」を4信金共通で作っていただきました。定期預金を運用するという本来の金融経済活動を行いながら、同時にその価値の一部を流域学校の活動へ御支援下さるという事業を、地域密着型金融機関のCSR活動として実施されたのです。これこそ企業活動と住民運動が互いの価値を共有するCSV（Creating Shared Value）行動として評価されることでしょう。

また流域学校のメインプログラム「備中志塾」は5年目の節目を迎え、今年度は完全入塾制といたしました。流域学校の校長でもある神崎宣武先生の備中のリベラルアーツとも言うべき普遍の知恵を学ぶ講義は今年度岡山県備中県民局協働事業にも採択され全6回開催され、塾生全員が満足するものとなりました。加えて昨年8月31日に神崎校長が岡山県の最高賞である三木記念賞を受賞された事は、学校関係者にとって誠に誇らしく、喜びに堪えない出来事でした。

この他にも、総勢9名の理事・役員が主宰する団体による、自主事業・共催事業など多くの催しが開催されました。本書にその詳細が報告されていますのでご一読ください。

今まさに、高梁川流域に限らず日本全国で、いや世界中で「教育の大切さ」がキーワードになっています。時代が大きく変わっていく中で家庭教育や学校教育はもちろんですが、それらを補完する地域社会教育が必要なことは言うまでもありません。地域そのものや、地域にある諸団体や企業の持続的発展に欠かせない有用な人材がその地域で自立的に育っていく仕組みが必要です。その場の一つが高梁川流域学校なのです。

この高梁川流域学校は、高梁川を機縁とし流域と言うカテゴリーで括られた地域が基礎となった日本でも珍しい「流域思考」の運動です。

折しも環境省が森里川海という自然資本の価値を再認識する国家的事業を日本各地でスタートさせ、その一つとして「高梁川流域学校」を選定いただきました。その付託に応え、流域で様々な活動をしている諸団体と共通価値を尊重し合って今後も引き続き活動してまいります。

3年目となる今年度は新しい試みとして、住民の方々による「111人委員会」を組織する予定です。花見山から水島灘に至る高梁川の総延長111キロメートルに因んだ「111人委員会」は学校への支援組織であると同時に、厳しい御意見番の組織でもあって欲しいと考えています。どうぞご期待下さい。

3年目を迎えた高梁川流域学校に寄せて

公益社団法人共存の森ネットワーク理事長
一般社団法人高梁川流域学校顧問　澁澤 寿一

高梁川は古くから地域の動脈としての役割りを果たして来ました。中世では新見などの街に集められた農産物や鉄・漆・紙などが高梁川を下り、瀬戸内海を通って京都や近畿方面へと運ばれました。江戸時代には河口部の新田開発も、上流からの自然の恵みによって可能となりました。その当時、世界最大の100万都市「江戸」を流れる隅田川にはシロウオが上り、明治時代になっても、春先に屋形船の「おどり食い」が楽しまれていました。同じ時代、セーヌ川では渡し舟が転覆し、多くの水死者が出ています。その死因は、下水の整備により人間の排泄物が川に集まり、そこから発するメタンガスによる窒息死でした。江戸期では排泄物は田畑の肥料として重要な資源でした。都市の排泄物が、中・上流の農地を育み、そこから作られた農産物が都市を支えてきました。上中下流の物質循環が、その時代の経済を生み、人と情報、心の交流が流域という言葉となりました。現在は、倉敷、総社、高梁、新見など都市は単独で存在しますが、かつては流域一体の物や人のつながりが自給圏と文化を形成し、暮らしと経済の持続性を作り出してきたのです。

現在、私たちはモノが溢れ、江戸時代に比べれば、はるかに豊かで便利な社会を生きています。資源もエネルギーも使い放題です。しかし、地球環境はこの社会が持続可能ではないことを示しています。今の日本人の暮らしを、世界の人々が同じように真似ると、地球が2.5個以上必要です。地球は宇宙に漂う1つの星に過ぎません。その上にある自然も、地中の資源も全て有限です。

私たちはこれからどのような社会を生き、作っていけばよいのでしょうか?

持続可能な社会は、経済の中にあることではなく、自然の多様性や、それを利用し、つながり合う社会システムの中にあります。かつて「つながり」は「高梁川」そのものでした。そこに、流域人という「共感」が生まれ、そこに「信頼」と「協調」が育まれてきました。何千年も続く持続可能な社会とは、人々の心の奥底にある「愛」や「慈しみ」、「優しさ」や「赦し」という、普段私たちが宗教や芸術の中に投げ入れてしまっている「心のあり方」がつくるのかも知れません。

経済だけで豊かさを計っている現代社会にあって、美しい山並みと、風の匂いを感じられる高梁川で、一人ひとりが新しい生き方を自身でデザインし、お互いがお互いを認め、必要と思えるような「愛」に満ちた社会を築くための場が、この「高梁川流域学校」となることを願っています。

高梁川流域学校のための「社会的インパクト評価」のすゝめ

一般社団法人高梁川流域学校　理事
一般社団法人高梁川プレゼンターレ　代表理事　坂ノ上 博史

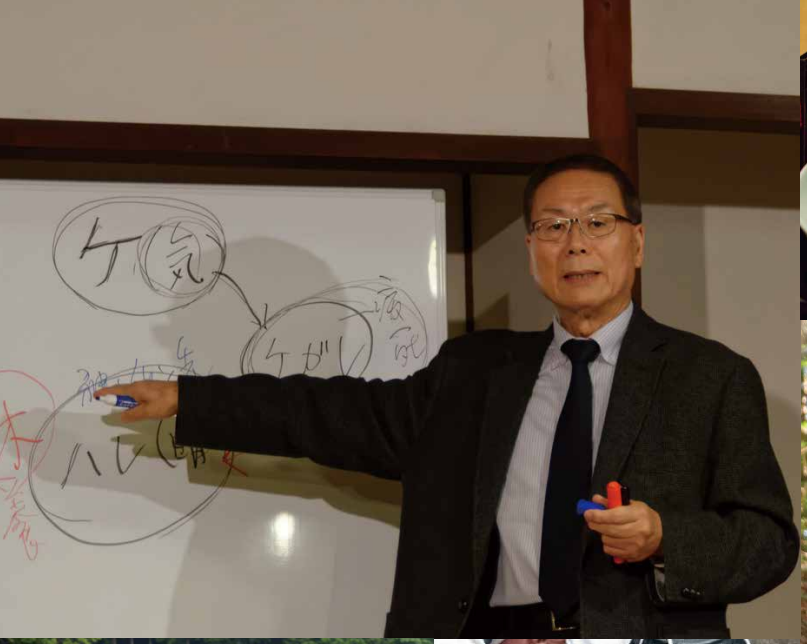
近年、「ロジックモデル」という用語が、政策評価や行政評価、あるいはソーシャルビジネスの事業評価において、用いられるようになってきている。これは、資源のインプット(input)、活動(activity)、アウトカム(outcome)ないしはインパクト(impact)の関係を論理的に図解するものであり、資金獲得、報告等のための評価、事業のマネジメントを目的とするものであるとされる。より具体的には「効率性評価(投入された資源と、実施された事業の効果とを比較分析する)」「インパクト評価(社会状況の改善における事業実施の因果関係の程度を分析する)」「プロセス評価(事業が意図されたとおりに実施されているか分析する)」「セオリー評価(事業計画が目的達成のために妥当かどうか分析する)」「必要性評価(事業そのものの必要性を分析する)」に資するものである。

一方、社会的事業における資金調達については、補助金、助成金、(第2の顧客を含む)受益者負担、自治体等からの事業委託、金融機関からの借り入れ(間接金融)、賛同者からの寄付・会費収入などが既存の手法としてあるが、いわゆる「クラウドファンディング」が世に浸透しつつあり、中小規模のプロジェクトベースでの資金調達も可能となった。加えて、「SIB(ソーシャル・インパクト・ボンド)」という新たな手法も登場しており、これはインパクト投資家から調達した資金を基に、行政サービスを民間のNPOや社会的事業者に委託し、事業が成果を挙げた場合にのみ削減された行政コストに基づいて投資家に報酬が支払われる、官民連携のインパクト投資の仕組みである。いずれの手法においても、短期的な結果に加えて、上述のような評価の仕組みを用いながら、中長期的な成果を明らかにすることが求められる。金融機関で10年以上放置されたお金を民間の公益活動に充てる「休眠預金活用法」が2016年12月に成立し、今後、ある意味では、国内における事業者間の競争が高まることが想定される。それは、「地方創生」となるか、あるいは「地方消滅」となるか、生き残りをかけた地域間競争の縮図ともなる。

「大学・企業・地域団体・自治体などと連携し、流域の自然や歴史・文化、および産業を『地域教育』の教材として、持続的に提供すること」を目的とする当学校においては、当学校そのものが事業(プログラム)の実施主体であることに加えて、流域の各地域で実践的な環境プログラムや体験プログラムを展開しているNPOやソーシャルビジネス事業者の中間支援的な役割を果たすことも期待されている。

高梁川流域中枢都市圏事業の一環となる事業を展開する当学校が、先駆的に率先してインパクト評価を実施し、その成果を「見える化」し、高めるとともに、各団体が行っているプログラムの評価・測定を支援することで、高梁川流域において、継続的かつ意欲的に、多数かつ多様な社会的事業の担い手が、安定的に資金・資源を継続調達し、効率的・効果的に事業をマネジメントして、そして、流域全体の持続可能性へのアウトカムを向上させる大きな一助となると考えている。

(参考文献)
『ロジック・モデルについての論点整理』財務省財務総合政策研究所副所長　大西淳也、同研究員　日置俊(2015)
『社会的インパクト評価の推進に向けて』内閣府・共助社会づくり懇談会　社会的インパクト評価検討ワーキング・グループ(2016)
『日本における社会的インパクト投資の現状2016』G8社会的インパクト投資タスクフォース国内諮問委員会(2016)



自然を楽しみ多様性を知る

節季を感じ旬を味わう

先人に学び匠に習う

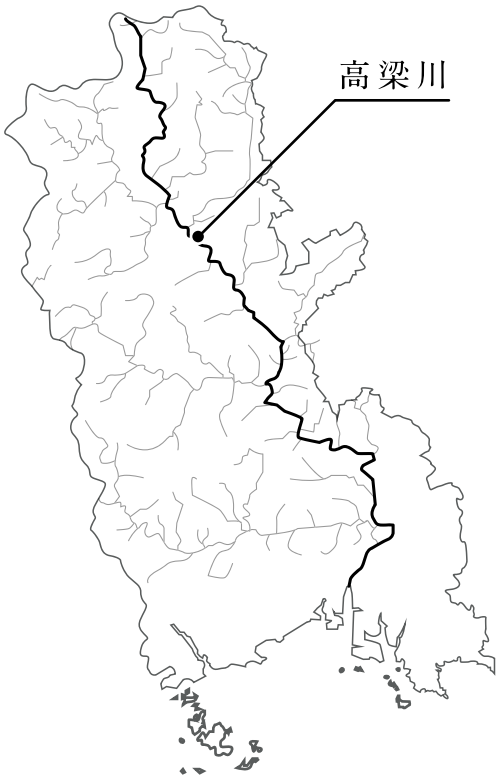
未来を創る仕事を興す

風土を学び次世代に繋ぐ

高梁川流域学校

高梁川流域学校は、大学・企業・地域団体・自治体などと連携し、流域の自然や歴史・文化、及び産業を「地域教育」の教材として、持続的に提供することを目的としています。

これらの活動により、「学校教育」「家庭教育」を補完し、若い世代の郷土愛・地域への誇りを醸成するとともに、さらに自治体や企業の人材育成研修を実施し、将来は、風土ツーリズムとしての地域観光プログラムの事業化を目指しています。



高梁川流域圏

- 新見市
- 高梁市
- 総社市
- 早島町
- 倉敷市
- 矢掛町
- 井原市
- 浅口市
- 里庄町
- 笠岡市

高梁川流域学校　事業紹介

事業実績報告　主催事業

備中志塾

備中地域の文化発信と人材育成、後世への継承
「普遍のねうち」を備えた次世代の人材育成

高梁川流域学校校長・民俗学者神崎宣武氏による備中志塾。平成24年から国指定重要文化財大橋家住宅を活用して、高梁川流域（備中）の歴史地理、文化を学ぶ高梁川流域学校の中核プログラム。神崎校長曰はく「私たち日本人が自らのアイデンティティを誇るにはまずは地場の文化認識から始めなくてはならない。地域文化に真摯に向き合い、互いに語り合える場所が備中志塾です」

今年度（平成28年度）から入塾制（有料）を採用し、32名が入塾し、30名が卒塾に至った。塾生の世代構成は、20代（5名）30代（1名）40代（6名）50代（7名）60代（11名）70代（2名）。男女比は、男20：女12で、幅広い世代から関心をもって、受講を頂いた。今年度は対面の講座だけでなく、ＣＡＴＶを通じて流域約12万世帯のＣＡＴＶ契約者に配信し、Ｙｏｕｔｕｂｅでの講座配信もあわせて行った。塾生の他、各回参加者も5～10名程度参加があり、大橋家住宅以外でも、高梁市頼久寺と総社市備中國総社宮で各1回「備中学のすすめ」というタイトルで入門講座を実施し、延べ284名の参加があった。また講座の内容を書き起こし、備中志塾のテキスト制作の基礎資料の作成も並行して行い、平成29年中には書籍化を計画している。

■ この事業の成果と課題

【成果】平成 28 年度は、新たに入塾制を採用して、30 名の塾生を輩出出来た。大橋家住宅での全 6 回の講座も塾生を中心に大変盛況で、総社市や高梁市でも各 1 回講座を開催することも出来た。流域 CATV とも協働して、流域の約 12 万世帯に講座を配信し、講座の視聴を高めることも出来た。

【課題】今後も備中志塾の志を伝えるため、CATV や WEB を活用した講座の配信を進めていきたいと考えているが、視聴率が不明な点が残念な点であり、CATV 会社とも協議して視聴率把握を課題とする。対面での講座についいては、引き続き入塾制を採用していくが、卒塾の基準等については一層の協議が必要となる。

事業実績報告　連携事業

高梁川トレイル

歩くことを通して、高梁川流域の自然の素晴らしさや歴史・文化を学び体験

高梁川トレイルは、一般社団法人水辺のユニオンが平成27年度から岡山県備中県民局協働事業提案募集採択事業で助成を受けながら、中国自然歩道やかつての往来、街道を独自に調査開発して、「風土ツーリズム」という新たしい観光プログラムをつくろうというもの。平成28年度は、前年度に調査開発した3つのコースの磨き上げとモニターツアーを実施しアンケート調査を行った。参加者合計75名。

【各ルートの特長】

●備中松山城と臥牛山ルート（JR高梁駅～備中松山城～高梁美しい森）約14ｋｍ

高梁市内の歴史的な街並みを通り、備中松山藩時代政務を執っていた御根小屋跡から天然記念物の広葉樹林を抜けて、備中松山城へ。その後鎌倉時代の遺跡大松山城跡を通って、人口樹林の森、皆伐地帯を通って、高梁美しい森まで。

鎌倉時代、戦国時代（備中兵乱）、江戸時代の治世、幕末など、歴史的な背景を学び、高梁川の灌漑、自然や生物多様性など、知的な刺激の多い高梁川トレイルの定番ルート。ショートルートとして、吉備国際大学国際交流会館から大池、高梁美しい森という別ルートも開発した。

●吹屋往来（成羽～吹屋）&魚荷道（とと道）ルート約15ｋｍ

明治期には、魚荷道（とと道）というように笠岡市の金浦から美星町三山を経由して、成羽、吹屋までの中山間の道を辿る急峻なルート。途中牛馬供養塔などがあり、牛馬と川（高瀬船）が物搬の中心であった生活を偲ぶことが出来る。また川や尾根が地域を分断し、それぞれ独自の生活文化圏を形成していった様子も窺うことが出来る。かつての人々が、川沿いでなく、中山間の最短の山道を作って地域をつなぎ移動していた人々の生活が実感できるルート。

●倉敷川とともに歴史を辿るルート（JR倉敷駅～天城～熊野神社～JR木見駅）約15ｋｍ

天領であった倉敷のまちの形成を阿智神社から解説し、倉敷川の源流大原邸前を出発して、倉敷川沿いに南下し、かつて海であった地形と地名を学びながら、減配合戦の名所「乗り出し岩」へ。佐々木盛綱の藤戸の戦いを検証して、藤戸寺、天城池田家跡、熊野神社、五流尊瀧院を回って、JR木見駅までのコンテンツ満載のトレイル。倉敷のまちの形成、新田開発、備前・備中の区切り、源平合戦、山伏・修験道など、知的好奇心が刺激される。

■ この事業の成果と課題

【成果】平成27年度から調査を開始した高梁川トレイルのモニターツアーを子供向き、一般向きに実施し、トレイルプログラムのブラッシュアップをすることが出来た。トレイルのマップ制作も順調に進み、流域で活動している他の団体とも協働して「高梁川流域トレイル推進協議会」を設立するところまで体制を整備することが出来た。

【課題】高梁川トレイルを商品として販売していくために、旅行業法のコンプライアンスのために、JTBなどの旅行会社との連携を進めることが課題となってきた。協議会にも参加頂き域外からの参加者獲得も協議していく。

事業実績報告　連携事業

高梁川マルシェ

美しく幸福な暮らし方を感じる時間を
流域のこだわりの食と暮らしの雑貨を通して提供

国指定重要文化財「大橋家住宅」をメイン会場にして、高梁川流域の食とモノづくりにこだわった商品プロモーションと販売、音楽とワークショップなどを組合せて、マルシェの場を流域の暮らしを楽しむ、豊かで美しい時間を共有することを目的にしている。

平成28年度は、10月1日(土)、2(日)の2日間、食の19店舗、モノづくり15店舗、合計34店舗が出店し、関係スタッフ数約１００名、学生ボランティア25名で開催し、約２５００名(２日間推定)の参加者があった。国指定重要文化財「大橋家住宅」、阿知２丁目公園、くらしき宵待ちＧＡＲＤＥＮの３カ所を会場に、倉敷市中心市街地活性化基本計画認定事業として、中心市街地に観光客等の回遊性を高める試みも視野においた。国指定の重要文化財建物やまち並みを背景に、単にモノの売り買いだけでなく、季節の色や香り、人との会話や交流を通して、地域の食やモノづくりの素晴らしさを知り、流域で暮らすことの豊かさを自然に体験することの出来るマルシェを重ねていきたいと考えている。マルシェでの「流域時間の過ごし方」が、流域に住む各自が、単にそこにいるだけでなく、流域の一部であること、過去や未来につながる重要な存在であることを感じでもらう機会となることを期待している。また、マルシェ出店者や関係者のクリエイティブなアイデアもフルに活かして、マルシェを流域の文化とするように質の向上も図っていきたい。

■ この事業の成果と課題

【成果】集客は約 2,500 名と大きな成果とはならなかったが、美観地区側から倉敷中央通りを超えて、人の流れをつくることには段々と実績が出来つつある。イベント型のマルシェは非常に多くなり、ただモノを販売するだけというマルシェも多いが、高梁川マルシェの質感を求めて参加頂く顧客も確実に増加している。

【課題】今後は参加者数だけでなく、参加者の属性や出店者のマルシェでの販売金額についても大学等と連携して調査し、他のマルシェとの差別化を進めることが課題となる。マルシェの運営についても次世代人材の育成や大学生のインターンシップ受入などを進めていくことも課題である。

事業実績報告　主催事業

SAVE JAPANプロジェクト

高梁川流域に生息する希少種生物を通して、人の生活と自然環境のバランス、生物の多様性の重要性を学ぶ

SAVE JAPANプロジェクトは、地域のNPO支援センターと環境団体、損保ジャパン日本興亜、日本NPOセンターの4者が協働して一般市民を対象とした体験型の環境保全活動を開催することを通じて「いきものが住みやすい環境づくり」を目指している。

平成28年度からは、プロジェクトの地域定着期と位置づけ、より一層地域の独自性を活かして「いきものが住みやすい環境づくり」を進める期間して、環境問題に触れる機会を提供し、環境問題への意識が高い地域住民が増えるコミュニティづくりに貢献する。

当団体は、損保ジャパン日本興亜岡山支店、NPO法人岡山NPOセンター、日本NPOセンター、流域の団体と協働して、絶滅危惧種となっている高梁美しい森周辺に生息しているブッポウソウ、新見市草間台土橋地区に生息しているウスイロヒョウモンモドキ、水生生物の多様な種が確認されている高梁川流域の淡水魚の保護活動と自然観察を行っている。

平成28年度の参加者は、各1回、全3回で56名。参加者の感想は以下の通り。

【ブッポウソウ】

・初めてブッポウソウのことを知った。講義も分かりやすく理解が広がった。岡山市内からそんなに離れていない地域でこのような自然環境があることに驚いた。（30代女性）

・希少種に指定されている生物のイキイキとした生態を知り、その生存に向けての何が出来るかを考える機会になった。（20代男性）

【淡水魚】

・淡水魚の種類の多いことにびっくりしました。また来たいです。（40代女性）

【ウスイロヒョウモンモドキ】

・このプログラムが始まって、ウスイロヒョウモンモドキための下草刈りには毎年参加している。来年蝶が舞う姿が楽しみ。（50代男性）

・地域の人たちの努力に頭が下がる。蝶の保護を通して、地域のまとまりがよくなっているのがわかる、（70代男性）

・今や毎年のことなので、地域に根差した活動になってきている。人工飼育を取り入れてから安定して生息が確認できるようになった。今後は蝶だけでなく、ホタルやブッポウソウの保護にも力を入れていきたい（60代男性）

■ この事業の成果と課題

【成果】SAVE JAPANプロジェクトは、損保ジャパン日本興亜(株)、NPO法人日本NPOセンター、NPO法人岡山NPOセンターとの協働で実施しているが、今年度からSAVE JAPANプロジェクトもフェーズ2となり、希少種生物の環境整備を持続的に行っていくことがテーマとされ、地域団体との協働も含めてその活動の一歩が踏み出せた内容であった。

【課題】地域団体の担当者の高齢化が課題である。次世代人材の育成の必要がある。

事業実績報告　連携事業

高梁川の環境保全

森を健全化することは、川や海を豊かにして自然循環を維持すること

NPO法人フォレストフォーピープル岡山が、おかやま森づくりサポートセンター「森の恵みを楽しむ活動支援事業」の採択を受けて、高梁美しい森の環境を活用して、森づくりの基礎講座及び技術指導講座を行った。「森は海の恋人」というが、森林づくりが流域圏の環境保全にとって不可欠な事業となることは間違いない。本講座では、継続的に森林づくりに関わることの出来る人材の掘り起しと彼らに必要な技術を修得してもらうために、二段階の講座形式で実施した。第一の講座は、森づくりの基礎講座（一般向け林分調査：森の健康診断）には、参加者20名。座学の後に、腐葉土の書き出し、植生調査などを実施した。第二段階では、技術指導には参加者48名。ロープワーク、林地残材の搬出実習などを行った。かつて高梁はマツ茸の産地で、大きな利益を得ていたこともあり、自然資本の見直しにも有効な講座となりそう。

この講座を通じて、森林の担い手は誰なのか?について一緒に考えていく。他人事にしないで自分事として、取り組んでいく精神をもつ人材を一人でも育成していくことが、大切と感じた。参加者の満足度も高く、協力者として一緒に地域課題に取り組む体制を整備していく計画である。

■ この事業の成果と課題

【成果】研修の意図をよく理解頂き、大変な研修内容にも関わらず多くの参加者があった。研修の継続性と自主的な事業にしていくための協働についての意見交換が出来た。今後につながる地域のステークホルダーを知ることが出来た。

【課題】研修の安全面のコンプライアンスの強化が課題。NPO法人内での適正な資格取得や研修制度なども整備する。

事業実績報告　連携事業

備中の食育

地域の新たな食文化の確立による地域活性化を目的に

岡山県では、農林水産業に深刻な被害を及ぼす鳥獣については、迅速かつ的確に駆除するため、イノシシを含む26種の鳥獣について市町村に捕獲許可の権限を移譲している。

新見市でも、「鳥獣被害防止対策協議会」を設置し、地元猟友会の協力を得て、特にその被害が拡大しているイノシシの捕獲に力を入れている。結果、平成25年度以降は新見市全体で、年間１５００頭以上のイノシシの捕獲に成功し、地域の鳥獣被害対策に貢献している。

しかしながら、かつて、「山鯨（やまくじら）」と呼ばれ、地域の食文化の中で重要なタンパク源となっていたものが、現在ではほとんど食用にならず、廃棄されている状態である。また近年の「ジビエ」料理ブームで関心は高まっているものの、適正な解体処理をせずに処理された肉を食した経験を持つ方々のシシ肉に対する根強い低評価（嫌悪に近い）によって、本来あるべきシシ肉の流通は阻害されてしまっている。

新見哲西地域のシシ肉生産者（年間約１００頭捕獲）、加工業者、流通事業者が協働して６次産業化ネットワークを組み、適正に処理され調理加工された「本来のシシ肉うまさ」「シシ肉の魅力」をプロデュースし生産者と消費者との間をつなぐ場づくりや新しい商品開発によって、その理解を促進し地域食材として流通を活性化させることを計画した。

具体的には、第一段階では、流域料理店に参加を頂き、シシ肉を使用した「ジビエ料理コンテスト」を開催し、料理人手で流域にテロワール（地味）に生まれかわるジビエ料理によって、シシ肉の魅力を伝え、需要拡大を図ることとした。コンテストは、まず１０／１（土）～２（日）に開催した高梁川マルシェでＰＲし、１０／２（日）には「ジビエの魅力を伝える」講演（講師：井口和泉氏）と猟師長尾三氏のトークイベントを、ＣＡＴＶが放映する形で、10月3日から10月31日までの約1カ月間のコンテストを告知した。それぞれの店舗が開発したジビエ料理もその思いと一緒に動画を撮りＣＡＴＶ、専用ＨＰを立ち上げ、Ｙｏｕｔｕｂｅ、Ｆａｃｅｂｏｏｋなどソーシャルメディアでの情報発信も行った。料理コンテストの採点は、Ｆａｃｅｂｏｏｋのアンケート機能を使用したＷＥＢからの投票と店舗で料理を食べた顧客から投票・アンケートによって集計し、優勝者には賞状と副賞としてコン猪１箱（24缶）を贈呈した。

結果は以下のとおりで、岡山市北区奉還町のＴｕｋｔｕｋＣａｆｅ「イノシシ肉のデミカツ丼」（料理人：中川妙子氏）が優勝した。

■ この事業の成果と課題

【成果】備中地域での初のシシ肉を使用したジビエ料理コンテストを開催し、参加店舗の協力の下、多数の参加者があり大きな成果を得た。イノシシを有害鳥獣としてだけでなく、ジビエとしてシシ肉の魅力を伝えるということも出来た。次年度は、高梁川流域情報ネットワーク（TIN）と共催でコンテストを開催することも決定した。

【課題】シシ肉の需要量拡大にはまだほど遠い。解体・加工段階の安全面確保と産地の明示や肉質のスペックの明確化によるブランド化も課題である。

事業実績報告　主催事業

水島コンビナートの進化

水島コンビナートについて理解を深め、最新技術や歴史を学び、未来社会について課題を共有

岡山県生産品出荷額の半分を担い、県経済の屋台骨を半世紀余に亘り支え続けてきた水島コンビナート。その誕生の秘話やその後の発展、公害発生と企業の対応、コンビナートの最新情報などを、企業OB達が語り、コンビナートを形成する各企業を海から眺めながら、生産の息吹を肌で感じて貰おうとする体験型プログラム。第二期【28年度】の参加者は、

昨年からスタートした「クルーズ」による効果もあって、地元の高校生達をはじめ、一般の人までを含め計60名に、また既に動き始めている第三期【29年度】では、参加者の範囲が地元教育関係者、倉敷市職員にまで及び、前年度を上回る注目を集めている。

更に、第三期後半には、JTBの、オプショナルツアー商品に決定、10月／12月の2回、全国からの旅行者を対象にナイトクルーズを実施の予定である。

これら実績を踏まえ、今後に向けては「①プログラムの更なる充実」と「②持続可能性」を探ることが急務となっているが、その達成に向け、①に関しては、コンビナート各企業から人的・経済的協力を得ること、②に関しては、人「後継者の育成」に主眼を置いて鋭意取組み中である。そうした中で、2017年8月19／20日】の「クルーズ」にガイド役として参画してくれることになった古城池高校と、その仲介役となった水島・福田公民館との出会いと連携が生まれたことは、本プログラムを、持続可能なものとする切欠となったに留まらず、連携の輪を高梁川流域全エリアに、また、小・中学校までに拡大させていく礎になった点で誠に興味深い。この貴重な機会を逃さず、流域各地で暮らす次世代を担う若者たちにとって、流域全体が貴重な学びの場となり、流域各エリア毎の交流が促進されることに依って、流域全体の風土と歴史・文化を存えていくことに繋がるよう、引き続き活動を継続していきたい。

■ この事業の成果と課題

【成果】水島コンビナートを学ぶプログラムは、様々な団体が実施しているが、コンビナート企業 OB が関わるプログラムは当法人が初めてであり、JTB などもこの点に価値をおいて観光商品として共同開発することとなった。

【課題】水島観光にはバスや船を利用することになりコストがかかるため、商品した場合の料金設定が課題。JTB ともこの点に留意して、商品の卸し価格を協議する。コンビナート企業 OB の確保も課題。

事業実績報告　連携事業

高梁フォレストジャンボリー

高梁の森の中で一緒に親子でワイワイと楽しみながら、自然を感じ分かち合う

「高梁フォレストジャンボリー」は、ＮＰＯ法人フォレストフォーピープル岡山との連携で、東京海上日動の環境保護活動事業「Ｇｒｅｅｎ Ｇｉｆｔ」に採択されて実施した。高梁川の中流域の元さとの境界と言える高梁の地から、自然と人との共生大切さを発信することを目的とした。私たちの暮らしは、きれいな空気、豊かで安全な水、子どもたちが安心して食べることが出来る美味しい食事など、自然が生み出す様々な恵みに支えられている。しかしながらこのような自然に気付かずに、当たり前のように思って、生活している場合は多い。高梁フォレストジャンボリーでは、そのような自然の恵みへの気づきを、親子が一緒になって楽しみながら体験することをテーマにして、親子トレイル、森の探検、森のクラフト、森の読書会、森のコンサート、森のマルシェ、森のゲームコーナーなど様々なプログラムを実施した。「ジャンボリー」とは、陽気な大きな集まりを意味する。五感を研ぎ澄まして「見ること」「聴くこと」「嗅ぐこと」「味わうこと」「触ること」を使って、自然を感じ分かち合うこと、今後もこのことを中心に実施していく。参加者は約１００名。次年度は、８月の「山の日」開催として、親子で自然を楽しむ場づくりの充実を検討していく。

■ この事業の成果と課題

【成果】昨年に続き２回目となる事業であったが、今回も地域団体等との連携が円滑に実施出来、更に深化したと感じた。参加者は約 50 名とやや少なめであったが、その分深く自然のことを学ぶ時間がとれた。

【課題】楽しさの中で見落とされてしまっているが、次年度は参加者や出店者へのアンケートを実施し、効果測定を確実に行っていく。高梁市や教育委員会との連携をもっと確立する。

事業実績報告　連携事業

高梁フォレストキャンプ

自然と暮らしのバランスのとれた、持続的に発展していく社会の実現を目指す

NPO法人フォレストフォーピープル岡山が、おかやま森づくり県民基金事業「三世代交流 地域子育て環境活性化事業」の採択を受けて、三世代で山歩きを楽しみながら昔話は織り混ぜず、子どもたちにもシニア世代の育った環境を体感してもらうのとあわせて、キノコを始めとする山の幸の発見と味わい、そして学びを通じて各世代の交流を深めることを目的にする。第1回（参加者9人：スタッフ2名）は、子どもでなく親世代に対する子育て事情についてレクチャーを行い、第2回（参加者：シニア10名、親世代10名、子ども10名；サポートスタッフ13名）はキノコ狩りと観察、第3回（参加者：シニア16名、親世代11名、子ども18名、サポートスタッフ6名）は三世代一緒にクリスマスリースやしめ縄づくりなどを行い、世代間のコミュニケーションを深めた。参加者計84名。

自然や文化を守というのは、自然や文化を知り、そして活用するということ。私たちは、人・自然・社会の関係性を大切に考え、それらをつなぐ人づくりを進めている。流域の豊かな自然が私たちの生活の中にどう残り、どうつながり、これからどう活かしていくのか。過去から未来へと文化がその姿を変えていくときに、大切な忘れ物をしていないか。私たちの活動は、森里川海のつながりの中で暮らしを意識する流域思考に基づいて、自然と暮らしのバランスのとれた、持続的に発展していく社会の実現を目指していきたいと考えている。その学びの場の一つとして、私たちの得意とするフィールド、いわゆる「里山」は、自然と暮らしが絶妙なバランスによって維持されている。きれいな空気、豊かで安全な水、子どもたちが安心して食べることの出来る美味しい食事など、私たちの暮らしは自然が生み出す様々な恵みに支えられている。

今回三世代交流事業によって、里山文化の残る高梁美しい森を舞台に、シニアの方々、親、子どもが一緒に楽しめる体験プログラムによって五感を研ぎ澄まして「見ること」「聴くこと」「嗅ぐこと」「味わうこと」「触ること」に集中して、それぞれの気づきを分かち合い、人とのふれあいの「場」を共有することが出来た。「しめ縄が出来た。昔のことをすることは過去のことを知ることだと思った」という感想も聞くことが出来、大きな成果を感じた。

事業実績報告

主催事業

高梁川ミーティング

高梁川流域学校の設立の経緯、理念を説明し、講演、シンポジウムを通し流域地域に広く情報発信

高梁川ミーティングは、２０１１年のＧＲＥＥＮＤＡＹ活動の時から、流域の環境保全活動等に取り組んでいる団体・個人との交流の場として、様々なテーマを掲げてミーティングを実施しきた。２０１７年は、環境省「地域循環共生圏構築検討業務」に採択されたことから森里川海をつなぎ支える流域圏構築を考えるために、高梁川流域学校がどのような役割を果たすか、流域圏での理解を促進するために、以下の２日間の日程でミーティングを実施した。

1.日時：平成29年2月18日（土）19日（日）　2.場所：平成29年2月18日（土）倉敷中央病院大原記念ホール　参加者：１００名　平成29年2月19日（日）大橋家住宅、倉敷物語館（多目的ホール、会議室）分科会参加者は、各30名

3.内容：2月18日（土）10:00～17:15【高梁川流域学校報告】10:00～12:00「挨拶」校長 神崎 宣武 氏（民俗学者）10:00～10:15「各事業報告」10:15～11:00「高梁川流域の基礎情報と活用について」11:10～11:40 新免 國夫 氏（一般社団法人データクレイドル代表理事）【基調講演】13:00～13:40 講師　奥田　直久 氏（環境省自然環境計画課長）演題「森里川海のつながりと自然・社会資本を活かした地域づくり」質問タイム（15分）

「コミットメントフォーラム」14:05～16:00「日本版ＤＭＯの役割」14:05～14:30 大社 充 氏（ＤＭＯ推進機構代表理事）フォーラムテーマ：「森川里海のつながりと自然・社会資本を活かした地域づくり」

「実践者からの発言」中村 泰典 氏（ＮＰＯ法人倉敷町家トラスト理事長）、坂本 万明 氏（高梁川流域情報ネットワーク代表）、古川 明 氏（水島家守会社Ｎａｄｉａ Ｌｏｃａｌ Ａｄｖｉｓｅｒ）、森光 康恵 氏（きび工房「結」代表）、岡野 智博 氏（一般社団法人水辺のユニオン代表理事）、山下 武伺 氏（ＮＰＯ法人フォレストフォープル岡山理事長）、赤木 美子 氏（一般社団法人チカク代表理事）、坂ノ上 博史 氏（一般社団法人高梁川プレゼンターレ代表理事）＜コメンテーター＞奥田 直久 氏（環境省自然環境計画課長）、吉澤 保幸 氏（一般社団法人場所文化フォーラム名誉理事 副代表、ローカルサミット事務総長）、荒木 勝 氏（岡山大学副学長・理事）、梶谷 俊介 氏（岡山トヨタ自動車株式会社代表取締役社長）＜コーディネーター＞大久保 憲作 氏（一般社団法人高梁川流域学校代表理事）「交流タイム」16:00～17:15 ファシリテーター：川嶋 直 氏（公益財団法人日本環境教育フォーラム理事長）「交流会」18:00～

2月19日（日）9:00～14:00 大テーマ：高梁川流域圏の今日と明日～多様な主体が交流する「場」づくりから始める流域の明日～「全体ミーティング（オリエンテーション）」9:00～9:15 国指定重要文化財大橋家住宅「分科会」9:30～12:00 ①倉敷物語館多目的ホール　テーマ：流域の自然・社会資本から生業を考えるコーディネーター（総評）：澁澤 寿一 氏（認定ＮＰＯ法人共存の森ネットワーク理事長）坂ノ上 博史 氏（一般社団法人高梁川プレゼンターレ代表理事）②大橋家住宅　テーマ：流域の記憶とその継承・展開を考えるコーディネーター（総評）：室 貴由輝 氏（岡山後楽館高等学校教頭）柏原 拓史 氏（ＮＰＯ法人だっぴ代表理事）「全体ミーティング（大橋家住宅）」13:00

■ この事業の成果と課題

【成果】
アンケート結果においても高梁川流域学校の認知が向上してきたことを実感できた。流域学校の顧問の先生方からも事業を継続するための様々なアイデアを頂くことも出来て、多様な主体による組織として協働していく体制が出来つつあることが共有できた。

【課題】
高梁川ミーティングの運営自体に関しては、まだまだ改善の余地が多く、運営面での強化が必要である。倉敷だけでなく、流域の他地域でミーティングを実施して欲しいとの要望もあり課題となっている。

事業実績報告　委託事業

高梁川流域学生ビジネスプランコンテスト事業

高梁川流域圏７市３町の高校に通学する学生を対象としたビジネスプランコンテスト

高梁川流域圏7市3町（新見市・高梁市・総社市・早島町・矢掛町・井原市・浅口市・里庄町・笠岡市・倉敷市）の高校に通学する学生を対象としたビジネスプランコンテストを企画運営した。

コンテストの募集は、チラシを6月下旬に制作し、高梁川流域の全高等学校に送付し、送付後ＴＥＬにて担当教員にフォローを行った。11月30日締切ということで再度チラシを制作して応募を募った。コンテストの申請可能性のありそうな以下の高等学校には直接訪問をし、コンテストに関する説明と申請を検討頂いた。日本政策金融公庫国民生活事業本部中国創業支援センターの協力で、ビジネスプラン作成支援のための研修を2回実施した。

申請されたビジネスプランは、倉敷商業高等学校（9件）矢掛高等学校（2件）倉敷鷲羽高等学校（1件）鴨方高等学校（1件）古城池高等学校（1件）の14件であった。1次審査は、1次審査は事務局にて、申請内容と高等学校に状況をよく確認した上で、6件のプランを選定した。最終選考は、平成29年1月21日（土）倉敷芸文館にて、日本政策金融公庫倉敷支店長伊藤俊徳氏を委員長として、岡山県立大学デザイン学部准教授三原鉄平氏、有限会社くま代表取締役辻信行氏、一般社団法人チカク代表理事赤木美子氏、岡山県産業振興財団経営支援部中小企業支援課コーディネーター矢野稔洋氏にて行った。

事業実績報告　協力事業

備中ｎｏ町家ｄｅクラス

江戸・明治・大正・昭和から平成の現代に伝わる地域の伝統的な生活文化の魅力を五感で体感

備中の町並みに残る、文化財クラスの建築物や、「蔵・倉」、「商家」、今も暮らしの残る小さな「町家」の空間で、江戸・明治・大正・昭和から平成の現代に伝わる地域の伝統的な生活文化の魅力を五感で体感していただきたいとの思いで、「町家でクラス、懐かしい未来」を合言葉に「備中ｎｏ町家ｄｅクラス」を開催した。開催地区は倉敷／美観地区及び周辺地区、玉島、下津井、茶屋町、浅口市／鴨方、金光、高梁市及び吹屋、新見市、総社市、矢掛町、早島町で47のプログラムを開催し、総参加者は１７６４名が参加した。

主催：備中町並みネットワーク
共催：岡山県備中県民局　第１４回岡山県民文化祭参加事業
企画・運営：備中町並みネットワーク（順不同）
倉敷伝建地区をまもり育てる会・かもがた町家管理組合・ＮＰＯ法人総社商店街筋の古民家を活用する会・吹屋町並保存会・備中矢掛宿の街並みをよくする会・新見御殿町・ＮＰＯ法人倉敷町家トラスト・一般社団法人岡山県建築士会・岡山県備中県民局・倉敷市・高梁市・浅口市・矢掛町
協力：大谷地区元気いっぱいまちづくり協議会（浅口市）・高梁川流域学校
浅口市地域おこし協力隊・金光図書館
備中町家クラス実施事務局：ＮＰＯ法人倉敷町家トラスト

■運営団体（順不同）大谷地区元気いっぱいまちづくり協議会・ＮＰＯ法人倉敷町家トラスト・玉島おかみさん会・かもがた町家管理組合・吹屋町並保存会・本町活性化委員会・ＮＰＯ法人総社商店街筋の古民家を活用する会・備中矢掛宿の街並みをよくする会・新見御殿町・倉敷友の会・マンマカフェ・倉敷市文化財保護課・倉敷伝建地区をまもり育てる会・倉敷物語館・大橋家住宅・つくぼ片山家プロジェクト・むかし下津井回船問屋・いかしの舎・一般社団法人岡山県建築士会

協力事業は、独自予算で活動を運営しているが、高梁川流域学校の活動趣旨に賛同し、その事業の一部として報告に加えても良いというもので、今後も協力関係を深めていく。

事業実績報告　委託事業

子ども自然体験プログラムリーダー研修

自然への理解と共生する感覚を持つ

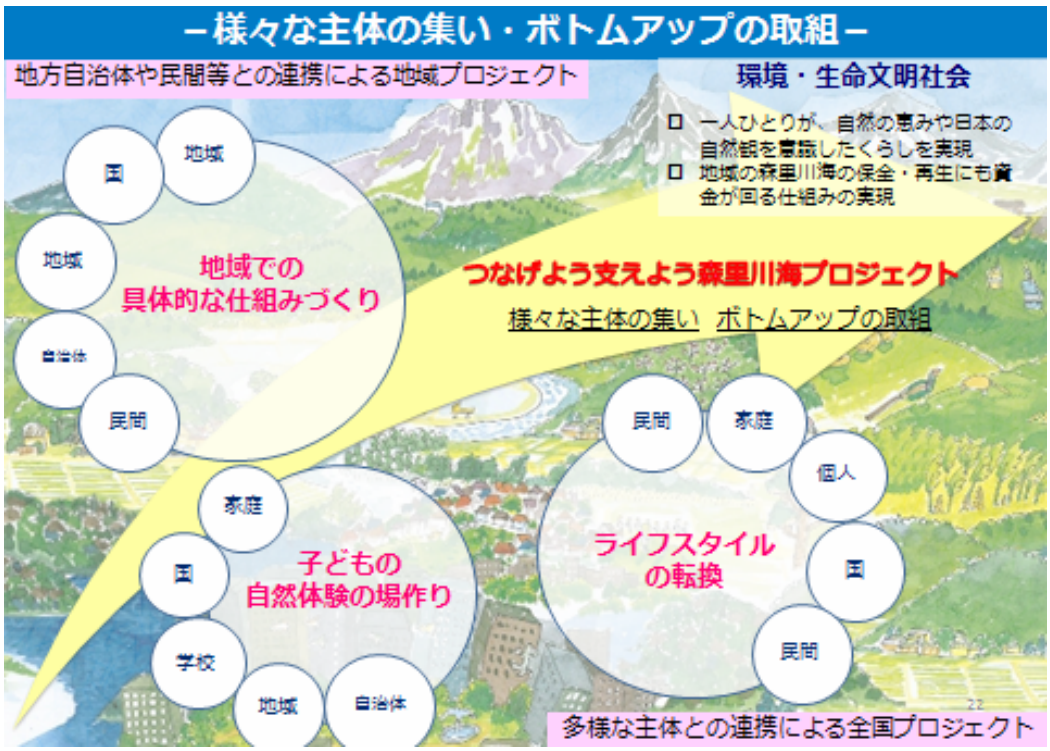
近年子どもたちが、さまざまな自然体験を通して、自然への理解や関心を深め、心身ともにバランスのとれた豊かな人間性を獲得していくということは、広く知られている。しかしながらその体験を効果的に子どもたちに伝えるプログラムリーダーの育成が追い付いておらず、その育成は喫緊の課題となっている。研修では、リーダー自身が自然から学ぶ態度をもち、バランスの取れた心身を鍛え、プログラムの設計から実施に至るまでのマネジメントや技術など修得することを目的として、3つのセッション各10名を定員として実施し、延べ30名の参加者があった。

第1セッションでは、【伝える技術】をテーマとして、倉敷市物語館において、公益社団法人日本環境教育フォーラム理事長川嶋直氏を講師として「KP法を活用した伝える技術」の研修を行った。第2セッションでは、【自然から学ぶ態度】【プログラム開発・実践】をテーマとして、高梁美しい森（高梁市松山7943-1）において、岡山シェアリングネイチャーの会の勝間光洋氏、小桐登氏を講師として、「ネイチャーゲームの体験を通して自然への理解を深めた。第3セッションでは、子どもを対象に「ネイチャーゲーム」を通して【学びの成果を共有】するための研修を高梁美しい森で行った。

これら3つのセッションを通して、参加者からは自然体験リーダーとしての基本理解が促進し、自らも自然への理解と共生する感覚を持つことが出来たとの評価があった。今後はこのような研修を継続していく体制整備をしていく。

事業実績報告　委託事業

環境省「地域循環共生圏構築検討業務」



地域の森里川海が生み出す恵みの経済的な評価を行う

一般社団法人高梁川流域学校では、平成28年度環境省「地域循環共生圏構築検討業務」の採択を受けて、全国10カ所の内の1つの実証地域として、平成30年度までの3カ年度の間、次のことを目的として、事業を推進することとなった。～地域の自然資源のストック（自然資本）である森里川海の適正な管理と活用による「地域循環共生圏」の構築に向けて、実証地域において「多様な主体によるプラットフォームづくり」、「自立のための経済的な仕組みづくり」「人材育成」に取組み、その効果を検証するとともに、地域の森里川海が生み出す恵みの経済的な評価を行う

このことは、高梁川流域学校が設立当初から「多様な主体によるプラットフォーム」であり、「人材育成」と「自立のための経済的な仕組みづくり」という所もまさに合致しているところである。環境省が目的とする森里川海のつながりとそれを支える自然資本の適正な管理と活用という文脈の中で、当法人の存在意義と目指すべき有り様も明確にしていくことも出来ると考えている。

とりわけ高梁川流域学校が「学校」を標榜し、地域人材の育成を目標としている所からも、これからの時代社会、森里川海のつながりおいて、地域に求められる人材の在り方を明らかにしていくことが不可欠である。平成28年度においては、このような理解を促進するため高梁川ミーティング２０１７では流域学校の取組からこれからの活動について検討し、その模様を倉敷ＣＡＴＶから約12万世帯に放送した。私たち一人ひとりが単に地域に住んでいるのでなく、自身を地域の一部と感じる地域生命主義的な思考の普及や持続的な開発のための教育（ＥＳＤ）が２０３０年に向けて希求する持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）への国民的な意識の向上を、高梁川流域学校の様々な取組みを通して流域圏で実現しモデル化していきたいと考えている。

事業実績報告

高梁川流域圏の持続的な発展に向けた連携に関する包括協定締結

「応援していきたい」と地域から評価される活動を継続していきたい

平成28年12月6日。一般社団法人高梁川流域学校と高梁川流域にある水島信用金庫、玉島信用金庫、吉備信用金庫、備北信用金庫の4つの信用金庫は、高梁川流域圏の持続的な発展に向けて連携していく包括な連携協定を締結しました。

具体的には、定期預金を運用するという本来の金融業務を行いながら、同時に定期募集総額に定率を乗じた額を当法人に活動へ支援するというものです。すなわち、平成28年度から30年度までの3カ年度に渡り、定期預金「高梁川の恵み」を20億円販売頂き、その募集額の0．03%分の60万円を流域学校に寄付頂くという仕組みをつくっていただきました。経営が異なる4信金が営業エリアをまたいで同一の定期預金を同時期に募集することは画期的です。これこそ企業活動と住民活動が互いの価値を共有するCSV行動として評価されると思います。流域の心ある企業が、社会的投資として託す「志金」。「高梁川流域ファンド」構築に向けても大きな一歩となる協定となると考えています。社会的投資によるステークホルダーからの評価・収益・報酬、いわゆるソーシャルリターンはどのようなものか、当法人はこの協定に基づく「志金」の活用を真摯に行い、「応援していきたい」と地域から評価される活動を継続していきたいと考えています。

団体概要

語り～部会

代表者住所：〒700-804　岡山市北区中井町1-5-16
電　　話：090-3365-9419
E-mail：nadia.furukawaakira@gmail.com
代 表 者：古川　明
所 属 員：2名（藤原哲男、斉藤　豊）
年 会 費：なし
設　　立：平成27（西暦2015）年2月

団体発足の経緯

水島で生まれ、水島コンビナート企業で働いた経験のある代表が、地元の人たちにコンビナートのことを知って貰いたいという思いに駆られるようになった頃、水島環境再生財団（公益財団法人）主催のコンビナート研修講師役に誘われ、コンビナート観光のガイド役や解説者を務めるようになったことが活動の原点。
その後、高梁川流域学校（一般社団法人）の発足に伴い、水島コンビナートに関連する内容を、流域学校のプログラムに加えることが契機となって、現在に至る。
会は、コンビナート企業OB2名と現役1名が加わり、計4名で開催した「コンビナート研修会」

●1960年代の水島コンビナート

主な活動

1：コンビナート研修【座学：水島環境学習センター】
・水島コンビナートの歴史と現状
・コンビナートルネッサンス
・LNGの話
・製油製品のできるまで

2：コンビナートツアー
・バスツアー
・クルーズ（昼・夜）

3：教材制作
・コンビナート建設時の歴史的写真のパネル化

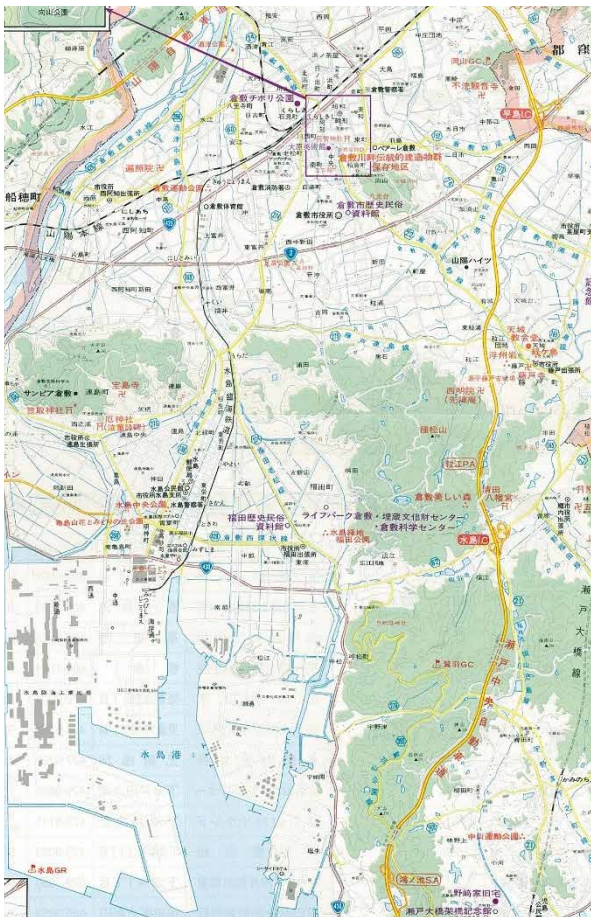
団体発足の経緯

県や倉敷市の屋台骨を支える水島コンビナートの歴史と、存在の意義、包含する課題、最新技術などを広く世の中に伝えていくこと

●水島コンビナートの夜景

これからの課題など

1：会員全てが石油会社出身であることから、今後は、石油会社以外のコンビナート企業からも人的・財政的協力を得て、講師陣の充実、後継者の育成を図りながら持続可能な体制づくりを目指すこと
2：安定的運営を図る目的で、これまでの一般研修に加え、行政や学校法人などを対象に定型プログラム化していくこと



●コンビナートツアー・ガイドマップ

団体概要

NPO 法人
フォレストフォーピープル岡山

団 体 住 所：〒700-0038　岡山県高梁市浜町1285-1
電　　話：0866-22-1000
E - m a i l：info@ffp-okayama.org
U　R　L：http://ffp-okayama.org
理　事　会：理事11名（理事長　山下武伺）
会　員　数：正会員67名、内正会員42名
年　会　費：正会員5,000円、賛助会員3,000円
設　　立：平成18(2006) 年3月

団体発足の経緯

国土の約 7 割にも及ぶ森林はその一部を里山として、長く我々の生活と共にあったが、昭和 30 年代以降、農林家の高齢化と過疎による維持管理の停滞、長期にわたる木材価格の低迷等により放置されはじめた。その結果、森林の持つ公益的機能の低下が危惧され、また、先人がこれまで培ってきた里山文化も失われはじめた。

このような森林（里山）を取り巻く諸問題に対し、森林資源の復活・保全、里山文化の継承、里山林の生物多様性を活かした青少年環境教育に積極的に貢献していくことを目的に平成 7 年に「高梁地域美しい森づくりの会」を設立、岡山県と協働で森づくり活動をｽﾀｰﾄした。その後、自立した運営体制を整えるため、平成 18 年に NPO 法人として活動を開始。

●1960年代の水島ｺﾝﾋﾞﾅｰﾄ

団体の目的

人・自然・社会の関係性を大切に考え、それらをつなぐ人づくりを推進している。青少年を対象とした地域の伝統的な生活文化や豊かな自然を活かした体験的な学びや環境教育を通して、健全な人づくり、里山文化の継承、自然環境の保全を推進し、持続的に発展する社会の実現に努めている。

主な活動

2006　:NPO 法人ふれあいの里・高梁　設立
2006 ～:行政との協働事業「緑と水の森林基金」「県民参加の森づくり事業」「おかやま共生の森事業」「おかやま森づくり県民基金事業」「高梁のﾏﾂ林・ﾏﾂﾀｹ再生事業」「里山ふれあいの森活動支援事業」「里山再生協働事業」「企業との協働による森づくり事業」に取り組む
2011　:法人名を NPO 法人ﾌｫﾚｽﾄ ﾌｫｰ ﾋﾟｰﾌﾟﾙ岡山に改称
高梁美しい森を活動拠点に、森林・林業体験ｲﾍﾞﾝﾄの開催、自然観察会の開催、林産の加工、企業による森林・林業研修の受け入れ、学校教育との連携による森林環境教育等の実施に努めている。
2014　:第 27 回森林ﾚｸﾘｴｰｼｮﾝ地域美化活動ｺﾝｸｰﾙ　協会会長賞（公益社団法人日本ﾚｸﾘｴｰｼｮﾝ協会）
2014　:平成 26 年度 生き活き岡山推進賞（岡山県）
2016　:ｿﾛﾌﾟﾁﾐｽﾄ日本財団 社会ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ賞　(公益財団法人日本ｿﾛﾌﾟﾁﾐｽﾄ日本財団）

これからの課題など

現在、ﾌｫﾚｽﾀｰの育成と森づくりの実践として「ﾌｫﾚｽﾄｽｸｰﾙ (2 回 / 年)」「ﾁｪｰﾝｿｰ及び刈払機使用のための安全講習※労働安全衛生法に基づく (2 回 / 年)」「ﾛｰﾌﾟｳｨﾝﾁを活用した隣地残材搬出講習 (1 回 / 年)」「森の健康診断による林分調査 (1 回 / 年)」「森林整備の実践※安全講習修了者はﾁｪｰﾝｿｰ使用可 (4 回 / 年)」を開催し森づくりを進めている。また、備中高梁ﾌｨｰﾙﾄﾞﾐｭｰｼﾞｱﾑ事業として青少年を対象とした「環境学習ｷｬﾝﾌﾟ (1 泊 2 日 1 回 / 年)」「昆虫観察会 (1 回 / 年)」、大人から子供まで楽しんで学べる「ｷﾉｺ観察会 (1 回 / 年)」を実施。また、「JX ｴﾈﾙｷﾞｰ (3 回 / 年)「ﾀｶﾅｼ乳業 (3 回 / 年)」「ｵﾑﾛﾝ岡山事業所 (1 回 / 年)」による企業との協働森づくり事業、高梁川流域学校との協働による「高梁川ﾄﾚｲﾙ」「ﾌﾞｯﾎﾟｳｿｳの保護活動」森の楽しみを凝縮した「高梁ﾌｫﾚｽﾄｼﾞｬﾝﾎﾞﾘｰ」の開催を行っている。

地域への想いとこれから
～地域に残る自然・文化・知恵の継承～

現在、ﾌｫﾚｽﾀｰの育成と森づくりの実践として「ﾌｫﾚｽﾄｽｸｰﾙ (2 回 / 年)」「ﾁｪｰﾝｿｰ及び刈払機使用のための安全講習※労働安全衛生法に基づく (2 回 / 年)」「ﾛｰﾌﾟｳｨﾝﾁを活用した隣地残材搬出講習 (1 回 / 年)」「森の健康診断による林分調査 (1 回 / 年)」「森林整備の実践※安全講習修了者はﾁｪｰﾝｿｰ使用可 (4 回 / 年)」を開催し森づくりを進めている。また、備中高梁ﾌｨｰﾙﾄﾞﾐｭｰｼﾞｱﾑ事業として青少年を対象とした「環境学習ｷｬﾝﾌﾟ (1 泊 2 日 1 回 / 年)」「昆虫観察会 (1 回 / 年)」、大人から子供まで楽しんで学べる「ｷﾉｺ観察会 (1 回 / 年)」を実施。また、「JX ｴﾈﾙｷﾞｰ (3 回 / 年)「ﾀｶﾅｼ乳業 (3 回 / 年)」「ｵﾑﾛﾝ岡山事業所 (1 回 / 年)」による企業との協働森づくり事業、高梁川流域学校との協働による「高梁川ﾄﾚｲﾙ」「ﾌﾞｯﾎﾟｳｿｳの保護活動」森の楽しみを凝縮した「高梁ﾌｫﾚｽﾄｼﾞｬﾝﾎﾞﾘｰ」の開催を行っている。

団体概要

TIN 高梁川流域情報ネットワーク

代表者住所：〒710-0803倉敷市中島2661-1(倉敷ケーブルテレビ内)
電　　話：086-466-1717(倉敷ケーブルテレビ内)
E - m a i l：sakamoto@kct.co.jp
構 成 団 体：高梁川流域コミュニティ・メディア8社　会長　坂本万及び役員 明(倉敷ケーブルテレビ社長)　副会長2名　幹事1名
設　　立：平成27年3月3日(西暦2015年)

設立趣旨

当会は地方創生で掲げる中枢拠点都市圏構想を情報ネットワークの側面から支援するものとして、流域の歴史や文化、産業、流域住民への情報伝達を行うと共に情報の共有化を図り、情報発信を行う事としています。当会は流域の「多様性の共生による自立」を理念に地域の記録係として歴史を刻み、豊かな自然の中で子育てや生活が出来る地域社会を実現することを使命としています。実施計画は以下の通りとなっています。

・流域を網羅した各種情報収集及びコンテンツの制作
・制作したコンテンツのアーカイブ化とクラウドの構築
・各種プラットフォームへ載せて情報発信を行う
・流域内の通信環境を整備して、ブロードバンドを提供

TIN 事業活動

■ 2015 年度
①平成 27 年度高梁川流域デジタルアーカイブ 動画製作業務 (5 分× 20 本)　（倉敷市）
②「山田方谷」ビデオ製作業務　（山田方谷の軌跡実行委員会）
■ 2016 年度
①平成 28 年度高梁川流域デジタルアーカイブ 動画製作業務 (5 分× 20 本)　（倉敷市）
②「高梁川流域の起業人」番組制作業務　（倉敷市）
《その他パイロット事業》
・講演「備中志塾～備中の伝統文化の継承・発展」（全5回）番組放送
（主催:高梁川流域学校、制作:倉敷ケーブルテレビ）
・「備中ジビエ料理コンテスト」WEB動画製作 (2 分× 11 本)
■流域 Free-WiFi 整備
2015 年度から流域観光スポットへ各自治体が Free-WiFi を整備、施工管理受諾

2015年度デジタルアーカイブ動画一覧
5分動画×20本製作
流域6局で放送、公式サイトでNET配信

テーマ①「人物」	テーマ②「自然・文化、特産品」	自治体	制作局
大原孫三郎 倉敷の礎を築いた偉人	倉敷美観地区 受け継ぐ町並み	倉敷市	玉島テレビ放送 倉敷ケーブルテレビ
安原伝兵衛 石見銀山を再興	花ござ手織り伝承館	早島町	倉敷ケーブルテレビ
雪舟 総社で生まれた画聖	古代吉備文化発祥の地	総社市	
小野光右衛門 浅口の奇才	天文のまち	浅口市	
仁科芳雄 日本の原子物理学の父	まこもたけ ふるさとの逸品	里庄町	笠岡放送
小野竹喬 笠岡で生まれた日本画家	笠岡ラーメン	笠岡市	
平櫛田中 彫刻界の巨匠	星の郷 美星	井原市	井原放送
田中塊堂 「大字かな」の先駆者	矢掛本陣・矢掛脇本陣	矢掛町	矢掛放送
留岡幸助 社会福祉の先駆者	備中松山城 天守が残る山城	高梁市	吉備ケーブルテレビ
丸川松陰 山田方谷も師事 儒学者	備中国 新見庄	新見市	

2016年度デジタルアーカイブ動画一覧
5分動画×20本製作中

テーマ「祭り・民俗・無形文化財」		自治体	制作局
鴻八幡宮 祭りばやし	五流尊能院 護摩供養	倉敷市	倉敷ケーブルテレビ
乙島祭り	―		玉島テレビ放送
鶴崎神社 秋季大祭・神幸祭	―	早島町	倉敷ケーブルテレビ
赤米の継承	―	総社市	
大浦神社 競馬神事	おわけ祭り	浅口市	笠岡放送
大原踊り	―	里庄町	
白石踊	大島傘踊り	笠岡市	
綾いらず観音院 大祭	三原の渡り拍子	井原市	井原放送
矢掛の宿場まつり 大名行列	おはぎ神事	矢掛町	矢掛放送
日吉神社 祭礼	―	矢掛町	
備中神楽	備中たかはし松山踊り	高梁市	吉備ケーブルテレビ
鍛冶八幡神社 秋祭り	―		
太鼓田植	船川八幡宮 御神幸武器行例	新見市	

5.情報発信事業（倉敷市委託）

●倉敷まちづくりびと展

6.環境学習事業（倉敷市委託など）

●夏休み・宿題応援団

●近くの森の学校(高梁川流域学校初等部)・あちのもり分校

7.地域支援事業（地域の支援団体との協働）

●わらべうたで心をつなごう（ボランティア育成と文化の伝承）

8.地域支援事業（茶屋町社協との協働）

●（三世代交流、地域資源の発掘）

9.高齢出産の女性に対する支援事業

●アラフォーママの子育てひろば

団体概要

一般社団法人チカク

団体住所：〒710-1101　倉敷市茶屋町353-42
電　　話：080-2900-8110
F　a　x：050-3488-4116
E-mail：ekinotikaku@gmail.com
URL：www.ekinotikaku.com
職員数：14名(うち常勤2名)　理事3名・監事2名
代表者：代表理事　赤木美子
設　　立：平成20（西暦2008）年12月

団体発足の経緯

当法人は、倉敷駅前にあった倉敷チボリ公園の公益性の一部を継承するために、閉園直前の 2008 年 12 月 26 日に、チボリで働く女性スタッフを中心に設立されました。
発足当初の目的として、こどもの健全育成と、市民の生きがいの創出を図って市街地の活性化に寄与することを掲げ、こどもおよび一般市民に対する「ものづくり」、「本物体験」や「コミュニケーション能力の向上」、ならびに「中心市街地の活性化」と「環境の保全」のための事業と、その事業に関連する事業および情報提供を行う、としています。
設立から一貫して、社会の中の大小さまざまな矛盾や不具合を批判、論評するだけでなく、当事者として身近な課題に取り組んでいきたいと私たちは考え、行動してきました。目指しているのは、乳幼児から 10 歳ぐらいまでのこどもとその親を含む、小さな「コミュニティ」を、さまざまな形で町なかに作り続けること。
自然災害が多い日本で未来を生きるこどもたちのために、「当事者意識」を持って取り組む「姿勢」の大切さを伝え、さらにそのことが、こどもたちおよびその活動を通じて、大人たちにも伝わっていけばいいと思っています。
チボリで、私たちは町なかの森を育てていました。そしていまも森を育てるように人を育てる「志」をもって、事業を続けていこうと思っています。

主な活動

1.就園前の子どものための預かり保育事業

●ようちえんごっこプチぱれっと 年間利用者数：延べ1700人

2.幼児向け防災教育事業（企業などとの協働）

●子ども防災ネットワークおかやま

3.地域子育て支援拠点事業（倉敷市委託、常設）

●ちゃやっこひろば・チカク　年間利用者数：延べ3,200人

4.表現活動支援事業

●ミュージカル・ハンスの冒険

団体概要

NPO 法人倉敷町家トラスト

団 体 住 所：〒710-0053　岡山県倉敷市東町1−21
電　　話：080-5232-6462
E - m a i l：info@kurashiki-machiya-trust.jp
U　R　L：http://kurashiki-machiya-trust.jp
理　事　会：理事12名（代表理事・中村泰典）毎月1回
会　員　数：会員276名、内正会員55名
年　会　費：正会員5000円、賛助・準会員2000円
設　　立：平成18（2006）年5月（10月NPO法人認証）

団体発足の経緯

昭和 24 年に民間団体「倉敷都市美協会」が設立され、戦後の倉敷の景観保全運動が倉敷川畔からはじまる。市は「倉敷市伝統美観保存条例」を制定し、昭和 54 年に「重要伝統的建造物群保存地区」（13.5ha　その後平成 10 年に 15ha に拡大）として国の選定を受ける。平成 2 年には全国にさきがけて背景保全条例を制定したが、住民団体の活動は消極的になり個人の保全に任せていた。
平成 18 年、目立ち始めた空き家の改修と利活用を進めるためNPO法人として団体を設立した。

団体発足の目的

倉敷川畔重要伝統的建造物群保存地区及び周辺の未利用町家の再生・利活用を目的に、町家調査研究・町家生活体験・滞在・定住促進・地域活動、地域文化の継承を進めている。

活動

2006:倉敷町家トラスト設立
2006：内閣府より平成 18 年度全国都市再生モデル調査事業・NPO 法人認証・登録、町家調査開始
2007:町家再生第一号「御坂の家」竣工、倉敷市旧街道ファサード整備調査事業
2008 ～ 10：良好な景観、まちなみ形成モデルスタディ業務（国土交通省）
2010:都市景観大賞「美しいまちなみ大賞」受賞団体
2011:第一回地域再生大賞「準大賞」受賞、
「DONATIONくらしき」（岡山県「新しい公共の場づくり」事業）
2012:岡山県三木記念賞助成金団体選定、
「Kurashikimaps プロジェクト」（トヨタ財団助成事業）
2013:全国町並みゼミ倉敷大会開催（参加）
2013:日本ユネスコ協会連盟「プロジェクト未来遺産」選定登録
2014：備中町並みネットワーク設立参加、備中町並みゼミ開催（ ～以降毎年開催参加:5市1町）
2014：備中 no 町家 de クラス開催（～以降毎年開催参加）倉敷えびす商店街「歴史を生かした誘客事業」（経済産業省）
2015:中心市街地町家調査（倉敷市）
2016:宮坂町の家プロジェクト
2016:福武文化奨励賞受賞
・「まちにあかりを灯す」がキーワード!
（1）　来訪者があかりを灯す（滞在・交流）
（2）　暮らしのあかりを灯す（定住）
（3）　商店・事業所があかりを灯す（経済活動）
（4）　門灯・看板のあかりを灯す（新しい公共空間）
（5）伝統行事であかりを灯す（文化継承）
（6）イベントであかりを灯す（賑わい・交流）
（7）エコなあかりを灯す（環境配慮）
（8）祈りの明かりを灯す（東日本支援事業）
・くらしき手帖の発行（年一冊）

保存整備・利活用の状況

町家生活体験・滞在施設 1 軒、商業施設 3 軒、住居兼店舗 2 軒、住居専用 4 軒、交流拠点 2 軒、仲介 1 件、塀の修景 1 件の計 14 件。平成 28 年初めて町家を購入して改修を進めている（宮坂町の家）。

●（改修した倉敷町家トラスト事務所：交流拠点として活用）

課題

伝建地区の建造物保全は条例規制と補助金で効果は上がっているが、隣接地区では建築物の様式や素材の統一感はなく、プレハブ建築物やビルなどが建ち並び、空き地は駐車場になり、中高層のマンションも多く建ち、景観は無秩序な様相を呈している。伝建地区では南海・東南海地震時の減災に向けて、町家の耐震診断等の対策が必要であるが、費用が掛かるため、十分進んでいない。
平成 18 年 8 月、倉敷伝建地区に住民組織「倉敷伝建地区をまもり育てる会」ができ、他の市民団体も活動が活発になってきた。中心市街地活性化と町家の利活用において官民ともに活動を進めた結果、押し寄せる来訪者に対して、交通諸問題と伝建地区が観光商業モール化していくことに対して地元住民の不安が高まっている。
また、倉敷中心市街地では都市の機能及びコミュニティの再生・再編が求められており、仕組みの構築、実践が急がれる。
備中地域の町並み・町家の保存活用にも目が向けられ、活動支援の期待が高くなっている。

団体概要

一般社団法人倉敷未来機構

団 体 住 所：〒710-0053倉敷市東町1-21倉敷町家トラスト事務所内
電　　話：080-4629-6624
E - m a i l：nadia.furukawaakira@gmail.com
理事（役員）：4名（代表者　坂ノ上博史）
設　　立：2012年4月

団体発足の経緯

倉敷市における、協同プロジェクトの創出を目的として、2012 年4月に設立。
「made in KOJIMA」せんいのまち再生計画策定事業（倉敷市委託事業／ 2014 年度）、備中邦楽調査事業（備中県民局協働事業／ 2014 年度）などプロジェクトの立ち上げ、運営を行うとともに、一般企業の従業員研修や「倉敷市職員研修所 コミュニケーション＆モチベーション研修」などを担当する。
地域の中間支援・コンサルティング事業は、一般社団法人高梁川プレゼンターレを新たに設立し、事業を移管する。和楽器によるまちづくり関連事業は、備中邦楽の里プロジェクト実行委員会を新たに設立し、事業を移管する。

高校生・大学生などボランティアの活躍できるプロジェクトを創出
倉敷未来機構のキャッチフレーズ
『次代の歴史は、ぼくらがつくる。』

一般社団法人高梁川プレゼンターレ

高梁川流域における中間支援及びコンサルティング業務を行うことを目的として、2014 年に設立。
「高梁川流域ソーシャルビジネス推進事業（倉敷市／ 2014 ～ 2016 年）」「お茶と町並みで点てる玉島の魅力創出事業（倉敷市／ 2015 年）」「水島中心地域まちづくり研修事業（倉敷市委託事業／ 2015 年）」「高梁川流域経済成長戦略セミナー開催補助業務（倉敷市／ 2015 年）」「ピオーネ・パウダー・プロジェクト（倉敷市がんばる中小企業応援補助金）／ 2015 年」「テレワークで紡ぐデータキャピタル事業（倉敷市／ 2016 年）」等の企画・運営を担当。

倉敷市からの委託により、ソーシャルビジネスセンターを運営

ソーシャルビジネス支援センターのキャッチフレーズ
『誰でも簡単、社会起業。』

高梁川プレゼンターレのキャッチフレーズ
『流域の素敵なものをプレゼンテーション』

備中邦楽の里フェスタ実行委員会

■概要・実績
備中地域において、和楽器・邦楽によるまちづくり、地域活性化を目的として、2014 年に設立。
備中邦楽の里フェスタ in 玉島（商店街にぎわい補助金／ 2014 年度）、倉敷市文化遺産を活かした地域活性化事業（文化庁補助事業／ 2015 年度）、備中邦楽の里フェスタ 2016（高梁川流域観光プロモーション事業／ 2016 年度）、高梁川カフェ～和楽器演奏をキーコンテンツとした魅力発信～（高梁川流域圏販路開拓支援補助金／ 2016 年度）などの企画・運営を実施。

美観地区を中心として、音楽イベント等、文化体験・観光事業を展開。

備中邦楽の里プロジェクトのキャッチフレーズ
『守破離。一箇半箇。阿吽。』

団体概要

備中「聞き書き」実行委員会

団 体 住 所：〒719-1126 岡山県総社市総社2-15-28
電　　話：070-5670-7874
E - m a i l：kibikobo.yui@gmail.com
U　R　L：https://www.facebook.com/kikikakiokayama/
設　　立：平成22年4月

団体の経緯

・平成 22 年度笠岡市市民提案型協働事業に採択され笠岡の高校生有志による「聞き書き」を実施
・平成 23 年度から平成 26 年度　岡山県備中県民局協働提案事業に採択され備中地域の高校生有志による「聞き書き」を実施
・平成 25 年度岡山県生き活き岡山推進賞を受賞
・平成 27 年度岡山県多様な主体による地域支援事業に採択され、備中地域の高校生及び県内大学生有志による「聞き書き」を実施
・平成 28 年度海洋教育パイオニアスクールプログラムに採択され備中地域の高校生及び県内大学生有志による「聞き書き」を実施
・平成 29 年度海洋教育パイオニアスクールプログラムに採択され県内高校生及び大学生有志により実施予定。また、OB・OG の地域活動と人材育成を目的とする仕組みづくりのため、実行委員会を立ち上げ離島センターの助成事業申請中。
・平成 27 年度にスタートした高梁川流域学校の連携事業として実施（若者の人材育成プログラム）

団体の目的

地域は人と人との集合体である。そして、人はさまざまな経験を積み重ねながら生きている。その人生の生き方や働き方、その中で培ってきた知恵や技術、身体で覚えた感覚、過去の記憶や未来への願い等。それらをすべてひっくるめて、その人の人生を丸ごと受け止め、文章にまとめる作業が「聞き書き」だ。

経済という物差しだけでは測れない、日々の暮らしに見出す「安心」と「豊かさ」、自然と共に生きてきた「自信」」と「誇り」、人と人が助け合い世代をつなぐ「心」。「地域で暮らす匠（人生の先輩）」の人生を記録する中から、高校生・大学生は多くの価値を学び、共有する世代を超えたネットワークから、持続可能な未来へと『世代をつなぐ』『地域をつなぐ』『歴史をつなぐ』活動を生み出すことを目的とする。

スケジュール

5 月参加者公募
6 月「聞き書き」研修会

8 月インタビュー

9 月～ 10 月書き起こし
10 月文章構成研修会
11 月成果物作品作成
12 月フォーラム開催

12 月～ 2 月成果物作品冊子作成

団体概要

一般社団法人水辺のユニオン

団 体 住 所：〒710-0055　倉敷市阿知3丁目5-5
電　　話：086-434-8400
F　A　X：086-441-1228
E - m a i l：okanoc@gmail.com
U　R　L：http://www.w-union.jp/
理　事　会：理事10名　監事1名
代　表　者：代表理事 岡野智博
会　員　数：正会員20名、賛助会員2名
年　会　費：正会員10,000円、賛助会員10,000円
設　　立：平成22年（西暦2010）年1月26日

団体発足の経緯

2007 年度倉敷商工会議所を中心とした産学官連携組織が経済産業省「広域・総合観光集客サービス支援事業」に採択され、高梁川流域の「鉄の径」「酒蔵めぐり」観光など広域観光ルートの開発を行った。2008 年からは高梁川学校を立ち上げ、単なるテーマ観光から着地型観光への展開を図り、その実現のため人材の育成と経営的に自立した継続的な事業体の構築を目的とした。
その成果をもとに、2010 年 1 月に観光産業だけでなく流域の活性化と QOL 向上を目的として、高梁川流域の「水」でつながる個人・団体からなる流域連携を実践する当法人を設立した。

団体の目的

高梁川流域の豊かで多様な資源を活用した地域活性化事業を通して、地域経済の振興に寄与するとともに、地域生活の質の向上を図ることを目的とした事業を行う。

主な活動

【着地型観光･集客イベント企画】
H23 年度「龍の仕事展」（岡山県備中県民局）
H23 ～ H27 年度 「文化遺産を活用した観光振興・地域活性化事業」（文化庁）重要文化財大橋家住宅の活用
H23 年度～ 「高梁川マルシェ」（地域文化ﾌｪｽﾃｨﾊﾞﾙ）
H25 年度～ 高梁川トレイルによる風土ツーリズム開発（岡山県備中県民局協働事業）
H26 ～ 27 年度 SAVE JAPAN プロジェクト (希少種生物の保護活動)
H29 年度～ コンセプトショップ“中島屋平右衛門”運営
【地域商品の開発・流通販売】
H22 年度「ICT 雇用創造ふるさと絆プロジェクト」（総務省）新見道の駅ネットショップ構築
H23 年度「地域力新事業∞全国展開事業」（中小企業庁）
H25 年度 摘果した清水白桃ピクルス開発
H27 年度 シシ肉缶詰“コン猪”開発
H28 年度 備中ジビエ料理コンテストを主催
【地域産業人材の育成】
H22 ～ 25 年度から「就業力育成支援事業」（文部科学省）
H24 年度 GREEN DAYS COLLEGE 事業（岡山県備中県民局）
H25 ～ 26 年度 備中志塾
【森林間伐活動と循環型エネルギー事業】
H22 ～ 26 年度から新見神郷「環境保全型森林間伐ボランティア事業」（おかやま森づくり県民基金 + 緑の基金）
H28 年度 高梁成羽森林間伐（森づくりサポート事業）

●高梁川マルシェ（国指定重要文化財大橋家住宅）

●高梁川トレイル（高梁市成羽魚荷道）

●コン猪（シシ肉の塩漬け）の開発

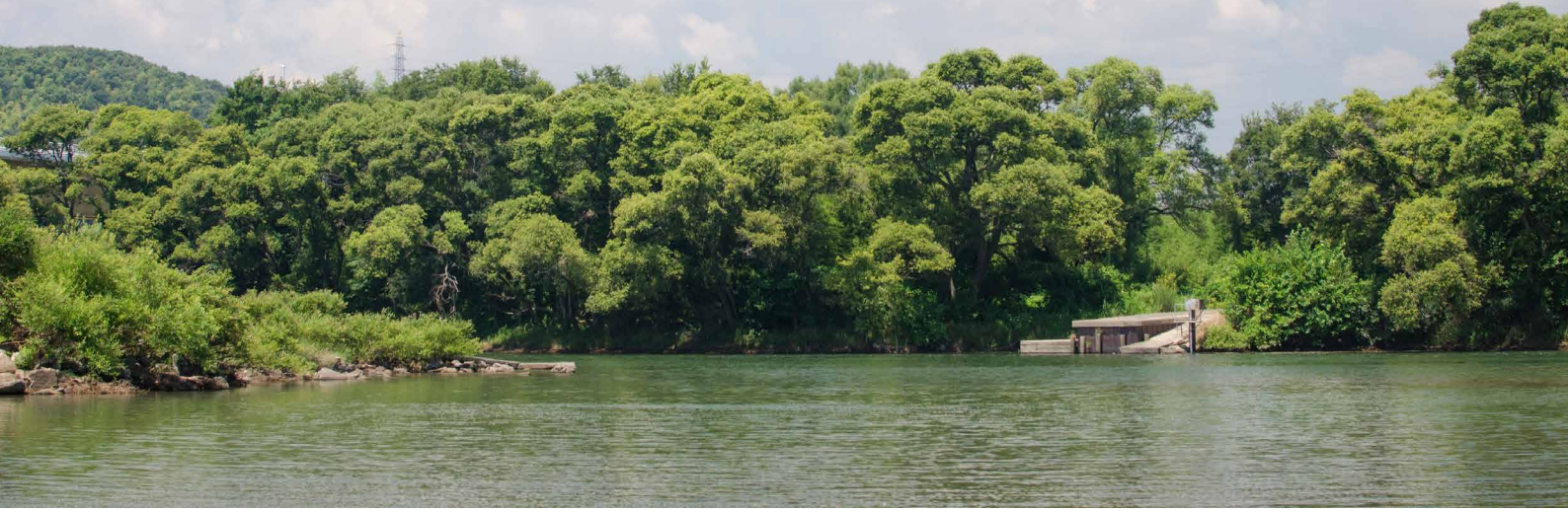
これからの課題など

(1)これまで実施してきた活動やプログラムを磨き上げて、協働する仲間を増やして、魅力化・商品化すること。
(2)高梁川流域学校の学びのプログラムの中で、位置づけを明確化して体系的に学ぶ仕組みを作ること。
(3) 組織基盤の強化と経営的な自立を図ること。補助金の依存しない収益と協働の仕組みを構築する。コンセプトショップ“中島屋平右衛門”の運営。

寄付金・助成金のお礼

平成 28 年度、下記の皆さまには当団体の活動にご理解いただき、多大なる寄付金、助成金を頂きました。ここにそのご厚意に対し深く感謝の意を表します。
皆さまのご期待に応えるよう、高梁川流域学校の関係者一同は、益々精進していくつもりでおります。今後ともご指導よろしくお願いいたします。

サンワサプライ株式会社 様
玉島信用金庫 様
吉備信用金庫 様
水島信用金庫 様
備北信用金庫 様
高梁川流域連盟 様



組織概要

校長	神崎 宣武	（民俗学者 旅の文化研究所所長・文化庁文化審議会専門委員）
顧問	澁澤 寿一	（認定特定非営利活動法人共存の森ネットワーク 理事長）
顧問	川嶋 直	（公益社団法人日本環境教育フォーラム 理事長）
顧問	大社 充	（特定非営利活動法人グローバルキャンパス 理事長）
顧問	山田 俊行	（トヨタ白川郷自然學校 學校長）
代表理事	大久保憲作	（倉敷木材株式会社 代表取締役会長）
副代表理事	森光 康恵	（きび工房「結」主宰）
副代表理事	赤木 美子	（一般社団法人チカク 代表理事）
理事	中村 泰典	（特定非営利活動法人倉敷町家トラスト 代表理事）
理事	山下 武伺	（特定非営利活動法人フォレストフォーピープル岡山 理事長）
理事	坂ノ上博史	（一般社団法人倉敷未来機構 代表理事）
監事	古川 明	（おひさまエナジーステーション（株）顧問）
監事	坂本 万明	（株式会社倉敷ケーブルテレビ 代表取締役社長）
事務局長	岡野 智博	（一般社団法人水辺のユニオン 代表理事）

高梁川流域学校のサポーターを募集しています

賛助会員へのご入会･ご寄附のお願い
私達の活動の趣旨に賛同し、支えて下さる賛助会員様、団体･個人の方からのご寄附を募集しています。
ぜひサポーターとして、優れた地域教育プログラムを次世代につなぐ高梁川流域学校を応援してください。
事務局あてにお名前･ご住所 / 連絡先をお知らせいただければ、入会申込書をお送りいたします。

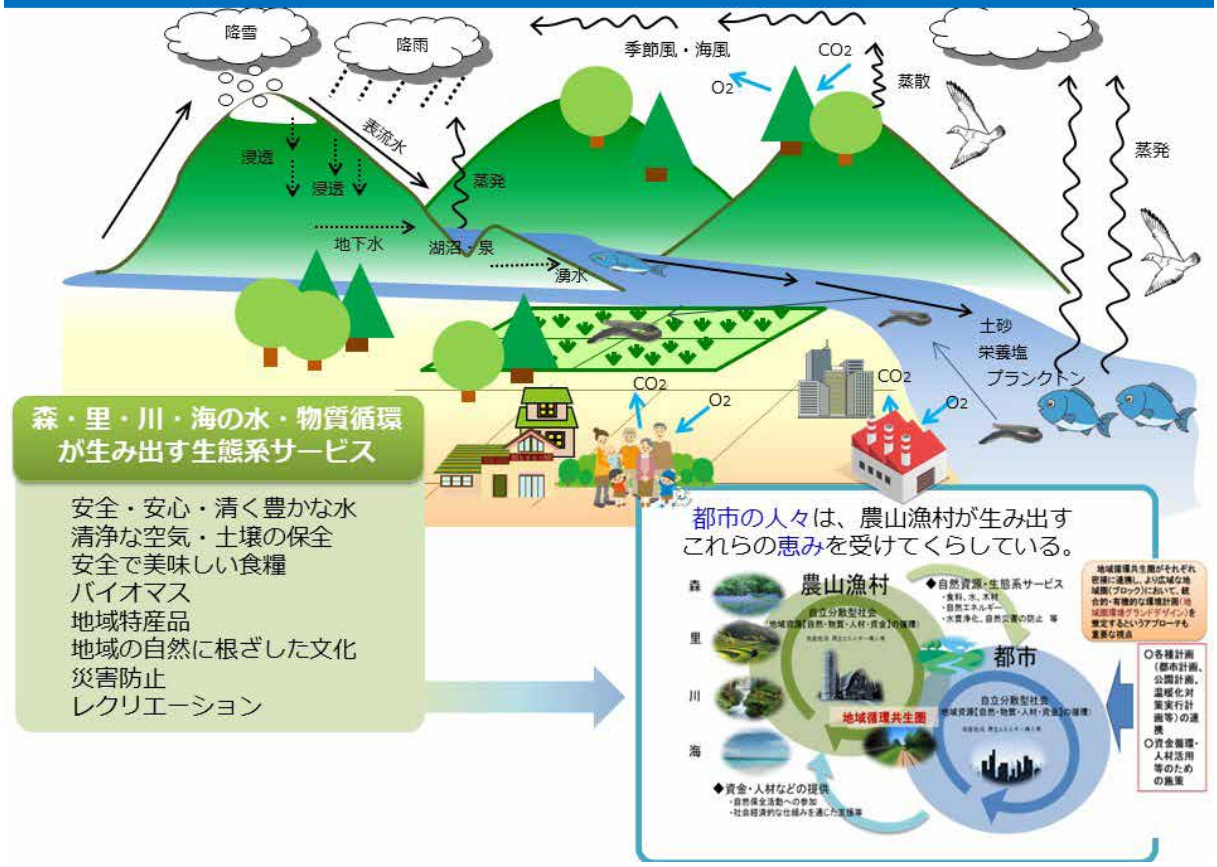
高梁川流域学校 事務局

住所	〒710-0055　倉敷市阿知 3 丁目 5-5
電話番号	090-4800-1110
FAX	050-3588-6427
メールアドレス	takahashi.river1506@gmail.com
ウェブページ	http://liton.jp

つなげよう、支えよう森里川海プロジェクト
今後の展開について

つなげよう、支えよう 森里川海

森里川海の循環が生み出す恵み



森里川海の連環確保の必要性－顕在化する暮らしへの影響－

森・里・川・海といった自然環境が提供する生態系サービスの恩恵は、全ての国民が享受。

人口減少

気候変動

高齢化

過剰開発

過疎化

つながりの喪失

近年、様々な要因により、我が国の自然環境は荒廃し、国民の暮らしにも影響。

□ 資源の枯渇

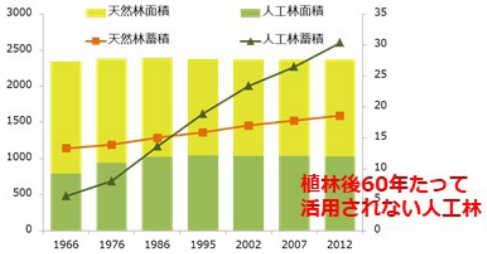
森･里･川･海のつながりが失われ、乱獲や海洋環境の変動なども相まって、ウナギなどの身近な資源が枯渇。

□ ふれあいの機会の減少

里地里山の荒廃により、子供達が自然にふれあう機会が減少し、生物多様性を保全する国民意識も低下。

□ 森林・里地里山の荒廃
□ 鳥獣被害の深刻化

人の管理が不足することにより、人工林の荒廃や耕作放棄地が増加。野生鳥獣の個体数が増加し、食害による森林荒廃、農林業被害が深刻化。



□ 災害の激甚化

森林の二酸化炭素吸収量の減少等も相まって、地球温暖化が進行

静岡県HPより

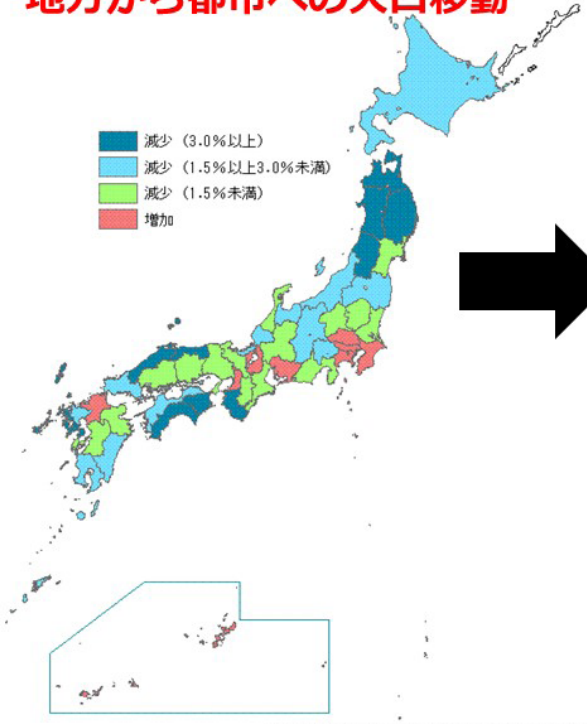
気候変動に加え、森里川海が荒廃することにより土砂防止・保水機能が低下

2013年台風25号の被害（伊豆大島）

森里川海の恵みを生み出す地方の人口減少

都道府県別人口増減率（平成17年～22年）

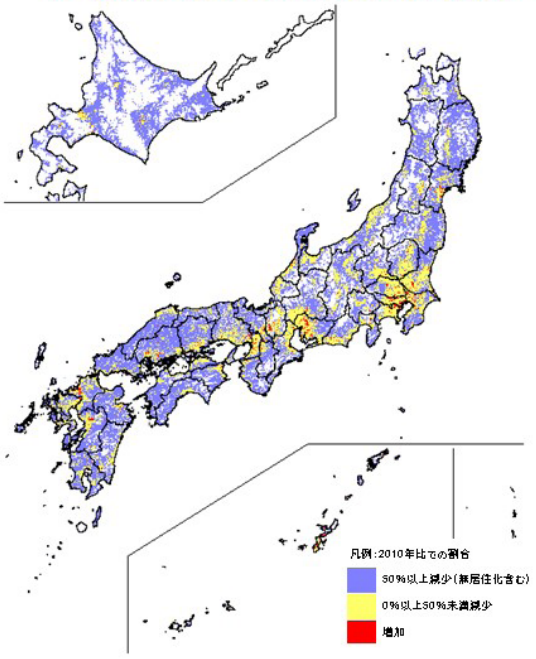
地方から都市への人口移動



（出典）統計局ホームページ/国勢調査からわかったこと

【2010年を100とした場合の2050年の人口増減状況】

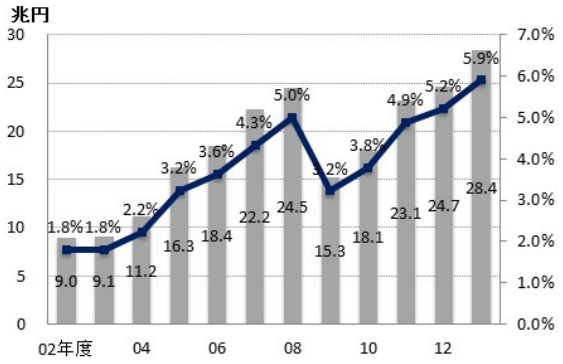
止まらない地方の人口減少



（出典）総務省「国勢調査報告」、国土交通省国土政策局推計値により国土交通省が作成。（国土のグランドデザイン2050参考資料）

ライフスタイルの変化がもたらす国外への依存

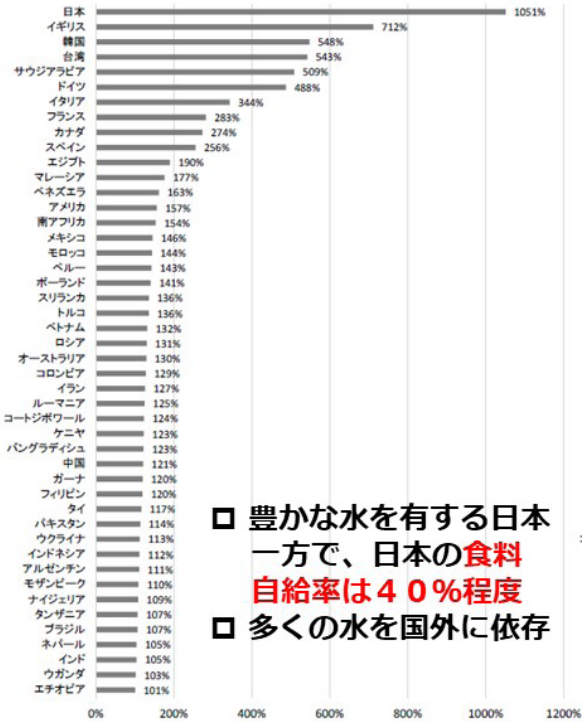
化石燃料の輸入額の推移とGDP比率



出所：財務省貿易統計、内閣府国民経済計算

- 里山に依存してきた燃料・資材
- その多くを国外へ頼ることにより、里山への**人間の働きかけが減少**

バーチャルウオーター



- 豊かな水を有する日本一方で、日本の**食料自給率は４０％程度**
- 多くの水を国外に依存

中央環境審議会意見具申（平成26年7月）

「低炭素・資源循環・自然共生政策の統合的アプローチによる社会の構築～『環境・生命文明社会の創造』～」

互いに影響し合い複合化する環境・経済・社会の諸問題

環　境	経　済	社　会
● 顕在化しつつある気候変動問題 ● 生物多様性の減少 ● 資源の大量消費・大量廃棄 ● 化学物質リスク、除染、公害健康被害の補償・救済	● 新たな成長分野の開拓の必要性 ● 化石燃料の大量輸入による資金流出 ● 社会保障費の増大と財政赤字 ● 地域経済の疲弊	● 人口減少・超高齢化、地方の“消滅” ● 市街地の拡散等による交通弱者の発生等 ● 東日本大震災を契機とした価値観の変化 ● コミュニティの衰退

現時代が直面する複合的諸課題にトータルに鋭く切り込む新たなアプローチ

ビジョン

環境と生命・暮らしを第一義とする文明論的時代認識と真に持続可能な循環共生型の社会像の追求　～環境・生命文明社会の創造～

- ○100年後まで見通した新たなパラダイム
- ○環境への負荷の少ない、循環を基調とする社会経済
- ○地域の主体性を最大限に生かしながら、ネットワーク機能を合わせ持つ魅力あるしなやかな社会の創出
- ○長期的な国の活力と魅力を引き出す国土のグランドデザイン
- ○人と自然のいのちの輝きを実感できる社会
- ○自然の恵みを基調としたコミュニティや伝統文化の再生
- ○健康寿命の延伸と社会保障費の抑制
- ○日本の技術力を生かした地域・世界への貢献

戦略

「技術」、「社会システム」、「ライフスタイル」のイノベーションを主軸として、地域から世界までをカバーする6つの基本戦略を展開

環境と経済の好循環	地域経済循環の拡大	健康で心豊かな暮らしの実現	ストックとしての国土価値の向上	あるべき未来を支える技術の開発・普及	環境外交を通じた22世紀型パラダイムの展開
グリーン経済	地域活性化	健康と豊かさ	国土価値の向上	環境技術	環境外交

低炭素・資源循環・自然共生を束にした統合的な環境政策

5

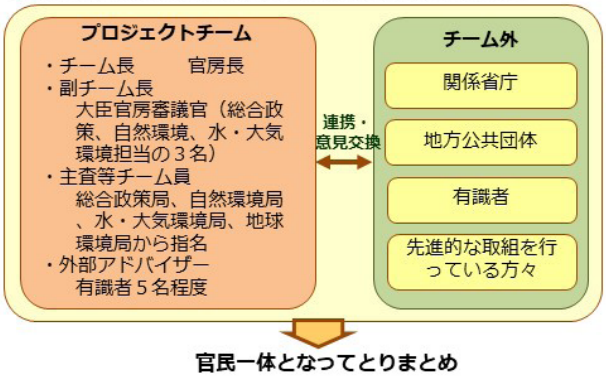
「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクト

私たちの暮らしを支える「森里川海」。それが今、過度の開発や利用、管理の不足などにより、つながりが分断されたり、質が低下しています。人口減少、高齢化が進行する中で、どのように森里川海を管理し、それを通じて地方を創生していくか、官民一体となって考えていく必要があります。

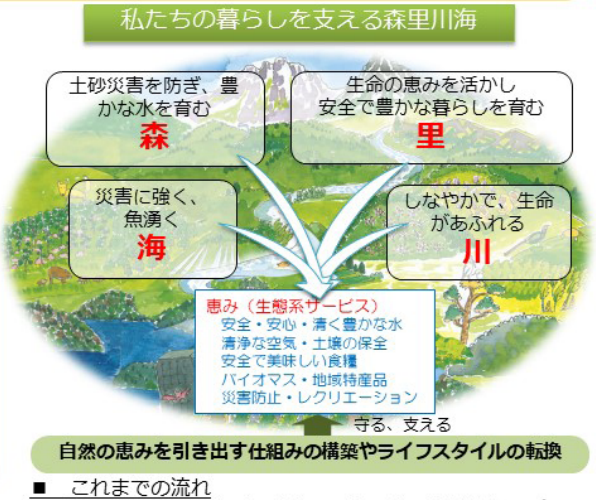
環境省では、「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトとして、地方公共団体、有識者、先進的な取組を行っている方々との対話や議論を行いながら、森里川海の恵みを将来にわたって享受し、安全で豊かな国づくりを行うための基本的な考え方と対策の方向をとりまとめ、全国で取組を進めていきます。

■ プロジェクトチームの立ち上げ

官房長をチーム長として、総合環境政策局、自然環境局、水・大気環境局及び地球環境局の職員、外部アドバイザー（有識者）で構成するプロジェクトチームを設置。また、広く地方公共団体、有識者、先進的な取組を行っている方々等と意見交換を行いながら基本的な考え方と対策の方向のとりまとめを行う。



※ プロジェクト名称「つなげよう、支えよう森里川海」について
自然資源を象徴する「森」「里」「川」「海」を保全してつなげること、また、それぞれに関わる人をつなげること、そして、都市部に住む人たちも含めて国民全体で「森里川海」の保全とそれに関わる人たちを支えることを示している。



■ これまでの流れ

26年12月	「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトチーム立ち上げ、第１回勉強会
27年１～６月	勉強会、意見交換会、公開シンポジウム等
６月	中間とりまとめ
10月～28年２月	全国リレーフォーラム、総括シンポジウム
28年９月	提言の公表

基本原則

○ **人口減少・高齢化社会が進むことを逆手にとる**

○ **地方創生に貢献**
- 自然資本の手入れ（管理）を推進することで雇用が生まれる
- 地域の人のつながりが生まれる

○ **森里川海のある地域だけでなく、国全体で支える**
- 森里川海の恵みは、その地域に限定されない。将来世代のためにもみんなで支える必要

○ **縦割りを解消し、関係者間、地域間の一層の連携**
- 森里川海のつながりを考え、取組をつなぎ、地域をつないでいく必要

○ **わかりやすく目指す姿を設定し、バックキャスティングアプローチをとる**
- 一つのわかりやすい目標があることで、複数の行政や地域が連携しやすい

○ **別の目的のための取組にも配慮を促す**
- 災害対策や農林水産業の推進などの別の目的として行われてきた取組についても、森里川海を豊かに保ち、恵みを引き出すことを前提に。

プロジェクトの目標

○ 森里川海を豊かに保ち、その恵みを引き出します。

森里川海が本来持つ力を再生し、恵み（清浄な空気、豊かな水、食料・資材等の恵みを供給する力や自然災害へのしなやかな対応力等）を引き出すことで、森里川海とその恵みが循環する社会をつくります。

○ 一人一人が、森里川海の恵みを支える社会をつくります。

私たちの暮らしは森里川海の恵みに支えられているだけでなく、日々の暮らし方（消費行動や休暇の過ごし方など）を変えることによって、私たちが森里川海を支えることができます。一人一人がそれを意識して暮らす、いわば人と自然、地方と都市が共生する社会への変革を図ります。

森里川海で拓く成熟した社会づくり

森里川海に手とつながる**新しいライフスタイル**により、**地域経済の好循環**と**心と体が満たされる真に豊かな暮らし**を実現し、新たな未来を描いていくことが必要

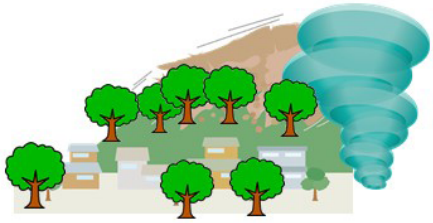
恵みを活用 地域経済の好循環

- 再生可能エネルギーの活用で地域循環を回す
- 個性ある風土づくりで交流人口を図る
- 少量多品種、高付加価値化の一次産品づくり

地域の産品（山菜）

バイオマス発電

- 生態系を活用して防災減災を図る



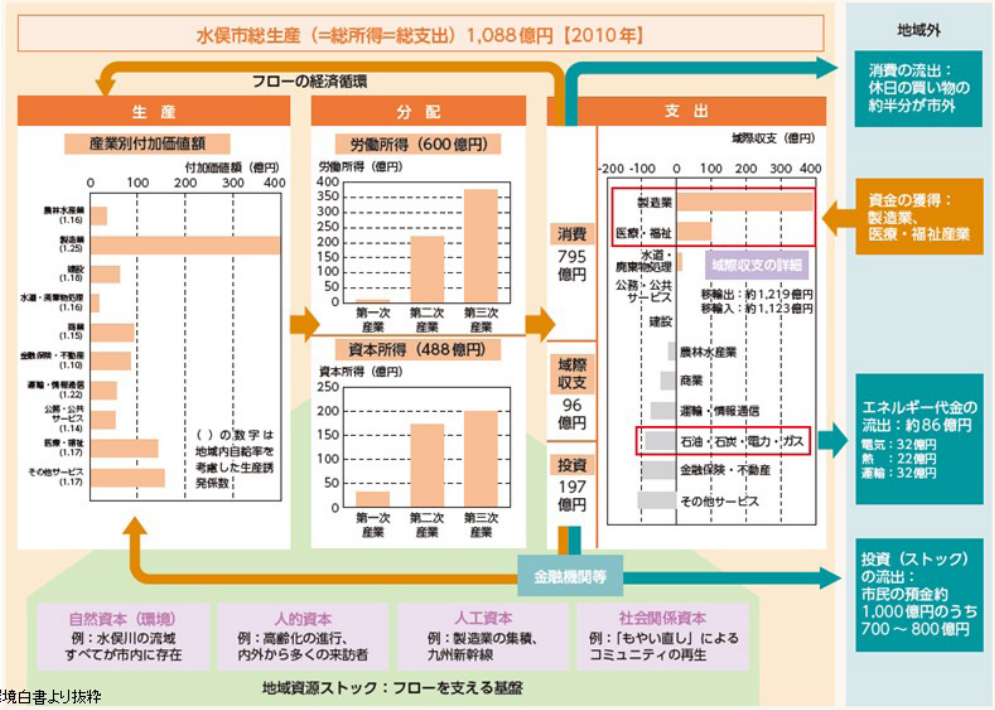
- 安心・安全な衣食住を提供する

身体にも環境にも優しい商品

安心・安全 豊かさ

地域経済循環分析：ストックの上に成り立つフロー

- 地域の資金の流れを循環構造に沿って見ることで、地域の「強み」と「課題」を定量的に明らかにする
- 健全なフローの経済が成り立つためには、自然資本をはじめとした地域資源（ストック）の充実が必要
- また、「再生可能エネルギー」という地域資源を活用することで、エネルギー代金の地域外への流出が削減できる



平成27年版環境白書より抜粋

10

地域の草の根の取組－８つの地域プログラム

森林のメタボ解消・健全化プログラム

日本の森林の蓄積量は過去最大。これを活用し、森林のCO_2吸収機能を高めつつ、森林資源を将来につなぐための事業を実施。

＜具体的な活動例＞
- 生物多様性を豊かにする森林施業のガイドライン作成・普及
- 生産材や製品の認証取得促進
- 木材の消費行動の適正化推進
- 木材市場の活性化　　等

生態系を活用したしなやかな災害対策

国土利用のあり方を人口減少社会にふさわしいものに見直す。森林、河川、農地の間の切れ目のない災害対策が重要。

＜具体的な活動例＞
- 地域毎の土地利用計画の見直し
- 自然の防潮堤ともいえるサンゴ礁に負担をかけない土地利用
- 自立分散型の再生エネルギーの活用　　等

江戸前などの地域産食材再生のための環境づくり

ウナギやアサリをはじめとする魚介類などを持続的に利用するために、山から川、海のつながりを見直し、環境の改善を図る。

＜具体的な活動例＞
- 河川内の生き物の移動を阻害する段差の解消
- 藻場・干潟の再生
- 海域の環境改善のための植林、湿地の再生等
- 「里海」づくり活動の推進

トキやコウノトリなどが舞う国土づくり

トキやコウノトリ、ツル類、猛禽類などの大型鳥類が生息できることを指標にして、国土、地域の環境づくりを促進。

＜具体的な活動例＞
- 多くの生き物が生息できる水田環境づくり
- 生き物にやさしい農業の推進
- 田んぼと水路の生き物の移動を阻害する段差の解消
- 「一村一生物運動」の推進等

具体的な取組アイデア　地域の草の根の取組－８つの地域プログラム

美しい日本の風景再生プログラム

「美しさ」、「心地よさ」も自然の恵みの一つ。圧倒的な雄大さや機能的な美しさは、人の心を育てるだけでなく、観光資源としても重要。

＜具体的な活動例＞
- 北斎などの風景再生
- 雄大な草原の再生
- 視点場の再生・整備
- 伝統野菜や料理の復活
- 「日本のふるさと」体験型観光の推進　　等

森里川海からの産業創造プログラム

自然資本財を活用した新たな産業の創造や、各種産業にとっての魅力的な環境を整備。

＜具体的な活動例＞
- 企業と地域などをマッチングさせる仕組み
- 産業創出のための研究開発の推進
- 市民ファンドによる再生可能エネルギー発電の実施　　等

鳥獣等から国土・国民生活を守るプログラム

農林業、生活環境、生態系をおびやかすニホンジカやイノシシなどの鳥獣の必要な捕獲等の対策ができる社会づくりを行う。

＜具体的な活動例＞
- 捕獲をプロとして行う専門的捕獲事業者の育成
- 鳥獣の人間のたんぱく源としての再評価、ジビエの振興　等

自然資本を活かした健康で心豊かな社会づくりプログラム

自然の恵みを活かした安全な食・衣、健康的な暮らし、伝統的な知恵の活用により、真に心豊かで健康な生涯を全うできる社会をつくる。

＜具体的な活動例＞
- 季節の旬を意識した食
- 温泉療法や薬草などによる伝統医療、ヘルスツーリズムの推進
- 福祉視察と連携した自然再生　　等

実現に向けた仕組み

国民・地域からのボトムアップの取組で社会の在り方を変革する新たな仕組みを導入
⇒自然の劣化を引き起こす社会から、自然を豊かに再生し恵みを引き出す社会に転換

自然の恵みを享受している国民一人ひとりが少額ずつ負担
(自然へのおさい銭・次世代への貯金)

自然へのおさい銭
次世代への貯金

森里川海協議会で議論

使途は、森里川海協議会で議論し、負担する国民の意見を幅広く反映するとともに、透明性を確保

自然の恵みを引き出す取組

国、自治体、企業、住民・NPOによる幅広い取組を通じて、自然の恵みを引き出す

13

森里川海循環共生協議会と地域創造ファンドの創設

森里川海循環共生協議会（仮称）

行政
企業
住民
専門家
NGO、NPO

継続的な運営が可能に

森里川海を支える人材の育成

各分野・活動を統合して実施

- ◆ 森林保全・利用
- ◆ 自然環境の保全・再生
- ◆ 衣食住
- ◆ エネルギー
- ◆ 健康
- ◆ 観光・交流
- ◆ 文化・伝統
- ◆ 教育・自然体験　　など

地域の課題・活動

資金

森里川海をつなぎ、保全しつつ、衣食住やエネルギーなどのくらしの基盤を見直し、自然の恵みを最大限に引き出すライフスタイルの転換を図る。

これにより、低炭素・循環資源・自然共生が同時に達成される真に持続可能な循環共生型の地域社会を創造する。

地域創造ファンド

基　金

- ◆ ふるさと納税
- ◆ 特典ポイントの活用
- ◆ 企業・個人からの寄付
- ◆ カーボンオフセット
- ◆ 地域の金融機関等からの出資
- ◆ クラウドファイナンス　　など

ライフスタイルの変革－3つの全国プログラム

森里川海の中で遊ぶ子どもの復活プログラム

子どもたちが、森里川海の中で遊んで自然を身近に感じ、その恵みを知る機会を増やすことにより、森里川海を将来世代につないでいく。

<具体的な活動例>
- 川ガキ・山ガキ・海ガキ養成学校開校
- 子どもの農山漁村体験促進
- 身近な川や田んぼの調査
- 森里川海大好き読本（仮称）の作成
- 森里川海の生業講座の開設　等

森里川海とつながるライフスタイルへの転換

一人一人の消費行動や余暇の時間の過ごし方を考え、転換することで、日々森里川海の恵みを意識し、暮らしを通じて森里川海の管理に貢献する。

<具体的な活動例>
- 地域産食材や環境配慮食材の購入促進
- 木材の消費行動の適正化の推進
- エコツーリズム推進
- 森里川海の管理に貢献する２地域居住の推進
- 環境に配慮したファッション等との連携による若者世代への啓発　等

森里川海の恵みの見える化プログラム

私たちが森里川海の恵みに支えられていることを実感できるよう、わかりやすく可視化をする。可視化については、地域の子どもや市民を巻き込みつつ進める。

<具体的な活動例>
- 流域を意識した森里川海の恵みマップづくり
- モニタリング１０００、生物多様性MY行動宣言の活用・充実
- 森里川海の健康診断
- 食や衣料の生産過程の可視化　等

全国リレーフォーラムの実施

キックオフイベント
10月30日　@汐留

全国４７箇所リレーフォーラム
ミニフォーラム 全国39箇所 ＋ シンポジウム 全国8箇所

プロジェクトの主旨に賛同する各地の団体主催のイベントとも連携

総括シンポジウム
2月20日　@富山

プロジェクトの普及

国民一人一人が、森里川海の恵みを実感し、その恵みを社会全体で支えていくという想いを広げていく。

ボトムアップによる推進

地域で既に進められている取組の現状や課題を洗い出し、個別プログラムや仕組みづくりなどに活かす。

延べ４千人の方に参加いただきました

16

「私たちにできるアクション」

森里川海のつながり保全・再生
人工林の集約　里山との関わり　山を元気に！　原点は森から
みんな水で生かされている　森は海の恋人　山から海までの水のつながりをしなしなやろう　川を元に戻す!!
身近なところ出来る事から　酒匂川の自然・森・体験　水のつながり　山林の保全→川海の保全　親水でつなぐ森里川海
源流～川までの一貫した環境教育　豊かな自然をみんなで作る　再生

取組の連携
つなげる　じゅんかん　連携　行政と市民の連携　行動から繋がりへ　友産友消チーム

つなぐ人 皆で力を合わせる
仲人　国民総活躍のボランティア　多くの人が参加できる仕組み　市民みんなが10本間伐　人材育成　リーダー　人を残す・呼ぶ

活用＝稼ぐ“しくみ” 財源
地産地消　食べて応援　食える農林水産業　人が生活できる　里山資本主義　地域活動の継続　緑の資源　森里川海を活かし、働く　様々な循環・環

子供たちのために！
子どもの笑顔　子供と命　未来の子供達　原風景を子供達に伝える

自然は楽しい！
しあわせ体験　みんな共遊　生きものと共に遊ぶ・楽しみ・そして愛　楽しさとご利益で行動　遊びスターもりかわさとみ☆　垣根を越えて汗を流そう

郷土愛
吉備の国＝美人を増やそう！　〇〇人の心と懐

知る－意識　伝える－体験する
気付き　自然から感謝される人になろう!!,　地域で楽しみながらつながる！　自然と親しむ　意識する自然　大人子どもの環境教育・意識の向上　自然を取り戻す活動を考える！　現状を知る　価値を知る　先ずは「感心」を高める事から！　気づき・知ることから　自然体験　再認識　現場を知ってもらう　何もない田舎なんてないっ!!

ライフスタイルの変革
自然環境の恵み　農産者の営みは日本の消費を支えている　東京五輪を契機としたライフスタイルの転換　非日常から日常に　自然に守られている私!!　オシャレ！　無邪気なライフスタイル　みんなの意識の転換

プロジェクトの今後のアクション

森里川海を豊かに保ち、その恵みを引き出す取組

- 流域における森里川海の保全・再生
- 取組同士の連携の仕組み
- 取組を支える人材育成
- 経済・社会システムとリンクした資金づくり

地域でまわる仕組みづくり

一人一人が、森里川海の恵みを支える社会づくり

- 森里川海の恵みへの意識・支える気持ちの醸成
- 子ども達の笑顔あふれる自然体験の場づくり
- オシャレで豊かなライフスタイルの提案

国全体で支える社会づくり

平成28年度森里川海プロジェクトの概要

「つなげよう、支えよう森里川海」
中間とりまとめ（H27.6）

↓

提言とりまとめ（H28.9）

・全国リレーフォーラムの実施（H27.10～28.2） 参加者からのコメント
・パブリックコメント（H28.5～6）

平成28年 実施事業

1．全国プロジェクト＝国民的運動
①ライフスタイル転換キャンペーン
「クールチョイス」、「NO! フードロス」、「食」や「健康」とも一体となったイベントを全国的に展開
②「森里川海大好き読本（仮称）」の作成
編集委員会を設置し、教員・小中学生を対象とした読本の作成を検討。全国の学校、図書館等へ配布
③普及啓発
ア．ふるさと絵本づくり
イ．シンポジウム、イベントの実施
④情報発信
ア．ホームページの更新
イ．ツイッターでの発信
⑤グッドライフアワードとの連携

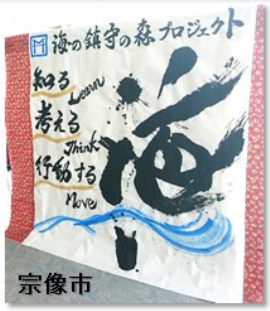
2．地域プロジェクト＝実証地域の支援
①対象地域の公募
環境省が応援する実証地域を公募。
10か所を選定し、以下②、③を実施。
②実証地域の支援
ア．多様な主体によるプラットフォームづくり
イ．自立のための経済的仕組みづくり
ウ．人材育成
③効果の測定、課題の抽出
対象地域にもたらした社会的、経済的効果や生態系サービスを測定、併せて課題も抽出

3．実証事業の評価手法検討
各地域での取組が経済や社会、そして生態系サービスにどのように寄与したかを「見える化」

森里川海の恵みを五感で感じる！

実証地域の選定

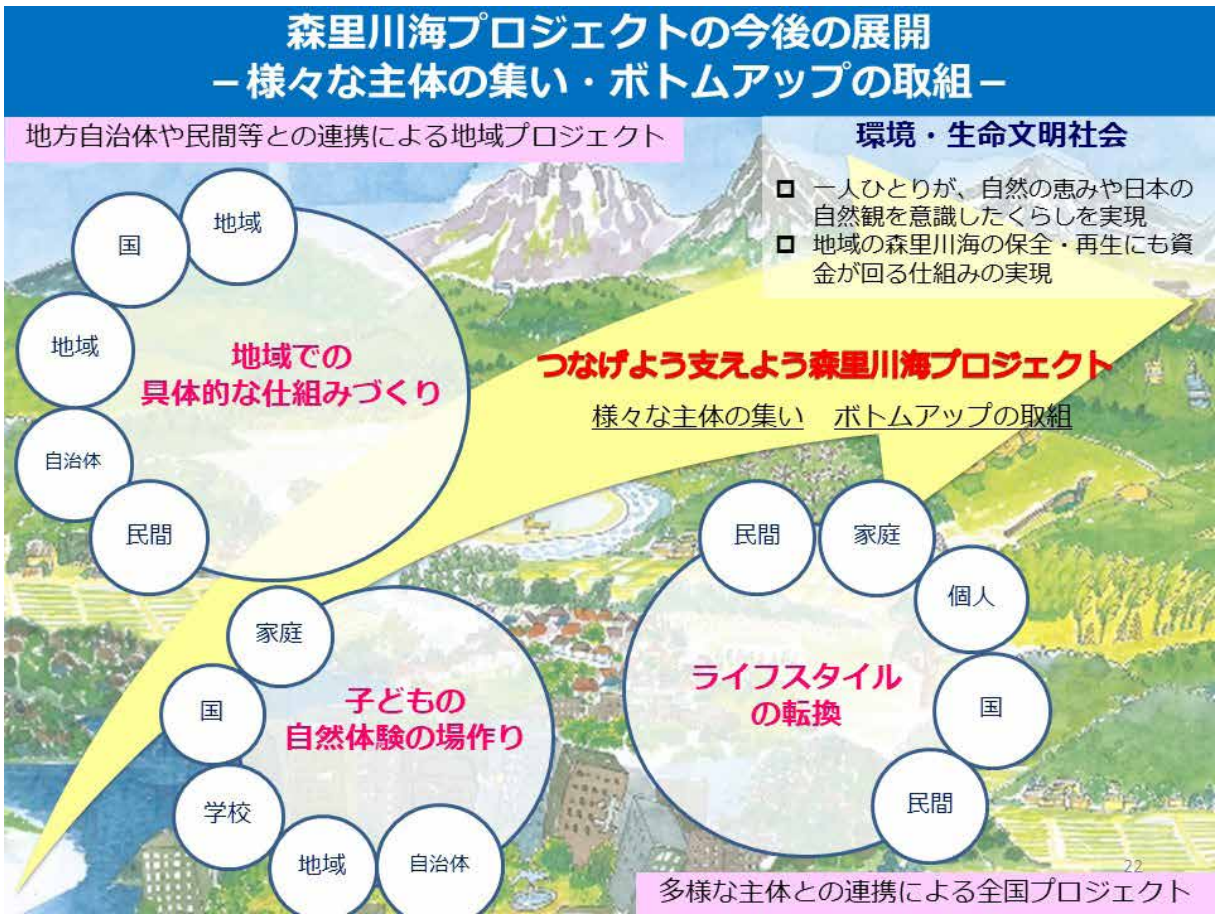
	実証地域	活動団体
1	宮城県本吉郡南三陸町	一般社団法人 CEPAジャパン
2	神奈川県小田原市	小田原市
3	石川県珠洲市	珠洲市
4	滋賀県東近江市	特定非営利活動法人 まちづくりネット東近江
5	大阪府吹田市・豊能郡能勢町	特定非営利活動法人 大阪自然史センター
6	岡山県高梁川流域	一般社団法人 高梁川流域学校
7	山口県	椹野川河口域・干潟自然再生協議会
8	徳島県吉野川流域	コウノトリ定着推進連絡協議会
9	福岡県宗像市	宗像国際環境会議実行委員会
10	佐賀県鹿島市	鹿島市ラムサール条約推進協議会



- ✓ 多様な主体による プラットフォームづくり
- ✓ 自立のための 経済的仕組みづくり
- ✓ 人材育成

地域で まわる 仕組み づくり

21


森里川海プロジェクトの今後の展開
－様々な主体の集い・ボトムアップの取組－
地方自治体や民間等との連携による地域プロジェクト
環境・生命文明社会
一人ひとりが、自然の恵みや日本の自然観を意識したくらしを実現
地域の森里川海の保全・再生にも資金が回る仕組みの実現
国
地域
地域
自治体
民間
地域での
具体的な仕組みづくり
つなげよう支えよう森里川海プロジェクト
様々な主体の集い　ボトムアップの取組
家庭
国
学校
地域
自治体
子どもの
自然体験の場作り
民間
家庭
個人
国
民間
ライフスタイル
の転換
22
多様な主体との連携による全国プロジェクト

恵みあふれる森里川海を次世代へ
豊かな恵みを生み出す森
コウノトリの舞う空
身近な生き物にあふれた里地
生き物の命をつなぐ河川
豊富な江戸前の魚介類
森里川海の連環が生み出す干潟
23

高梁川流域学校

一般社団法人 高梁川流域学校

【事務局】〒710-0055 倉敷市阿知3丁目5-5
TEL：090-4800-1110 FAX：050-3588-6427
E-MAIL : takahashi.river1506@gmail.com WEB：http://liton.jp